いつの間にか女サイヤ人になっていますた

無名戦士

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いきなりドラゴンボールの女サイヤ人になってしまった主人公。

両親は育児放棄で鍛えてくれそうにもなく、独学で鍛える事を強いられる。生き残る為に努力しながら原作となるべく関わらないようにするが、主人公はちょっとした好奇心で孫悟空の父親であるバーダックに近づいて・・・？

目次

第一話 …… 1
第二話 …… 6
第三話 …… 13
第四話 …… 21
第五話 …… 27
第六話 …… 37
第七話 …… 43
第八話 …… 53
第九話 …… 65
第十話 …… 74
第十一話 …… 83
第十二話 …… 90
第十三話 …… 101
第十四話 …… 106

第一話

起きたらサイヤ人が居ました、しかも俺は赤ん坊の姿というオマケつき。

目が覚めたら見覚えのある戦闘服に、サイヤ人特有の尻尾が目に入ったからすぐに察する事ができた。

驚きの余り誰だお前って叫ぼうとしたら赤さんのが聞こえてもうびっくり、なんとつい先日まで日本の成人男性がいきなり赤ん坊になっていたから一時間近く発狂してたよ。

一体誰が二次小説みたいな展開になると予想できるのだろうか？いや、できまい。少なくともこの展開は二次創作の中だからこそ楽しめるのであって、現実になって欲しくはない。

「あの赤ん坊、一時間近く泣いてるぞ」

「いや、泣いているよりあれは発狂のようだ」

ヤッベ、もし俺に自我があると知られたら下手するとそこら辺の惑星に飛ばされてしまう。サイヤ人の連中はとち狂った感覚を持ってるからな、慎重に行かねば。

取り敢えず落ち着こう。ひっひっふー、ひっひっふー・・・・・ラマーズ法じゃねー

よバーロー!!

兎に角深呼吸をやろう。落ち着いて落ち着いて、どうどう。

「きゅ、急に大人しくなりやがった、気味わりぃ」

気味が悪くてどーもすいませんでした。

それにしてもドラゴンボールの世界に来てしまったのか、しかもよりにもよってフリーザに破壊される前の惑星ベジータに、か。

もし破壊されるのが今日だったら俺死ぬぞ、空飛ぶのやってみたいから勘弁して貰いたい。そもそもドラゴンボールだってアニメしか見たことないぞ。無印は一回しか真面に見て無いし時系列だって曖昧だ。はっきりと覚えているのはピッコロ大魔王編からだからな。

Ｚは覚えているからともかく、ブウ編の後は超やＧＴに分かれているからもう分からん。超やＧＴも途中までしか見てないせいで役に立ちそうに無いから諦めるしかない。

兎に角、今はフリーザが惑星ベジータを破壊しないかビクビクする事しかできない。何せ今は赤ん坊の姿だから鍛えようにも鍛えられない、そもそも俺の戦闘力はどのくらいなのだろうか？流石に悟空みたいに戦闘力が２じゃない事を祈る。飛ばし子にされたら確実に死ぬ自信があるよまったく。

原作には当然関わりたくも無い。悟空やベジータ、ピッコロに会ってみたいが命を天

秤に掛ければ当然の事だろう。当面の目標はバーダックを見つけ出す事、彼がいなければ気が付いたらあの世に居ました展開を避けられるかもしれない。どうせ死ぬなら天国に行きたい。このまま生きたって嫌でも他のサイヤ人と同じ生活をしなければならないのだ。そうなれば地獄行きは確定事項だろう。かと言って今の俺には逃げ出せるほどの力が無いしどうしたものか。

しかし、成長したら嫌でも別の惑星を侵略しなくちゃならんのか・・・。今まで殺しとは無縁だった国で生まれ育ったからサイヤ人の生き方はどうにも好きなれない。既にサイヤ人に生れ変ったからあきらめるしかない、せめて外道にはなりたくないよなぁ・・・寝よ。

つーか俺の両親どこに居るんだよちくしょーめ。

あたしが生まれ変わってから早くも半年という時間が経過した。

両親があたしの様子を見に来たのは生まれ変わってから1ヶ月後、チョロっと来てあたしの性別や戦闘力を衛生兵に聞いたらすぐどっかに行ってしまった。

その時にあたしの性別は女だと言う事が分かった。聞いた時に思わず納得したよ、生まれ変わって一週間後位に一人称が俺からあたしになっていたからあの時は自分の脳を疑ったものだ。

前世は性交渉どころか恋愛のれの字も知らない生活を送っていたからちょっと悲しい、長年愛してきた息子ともう会えないのか・・・無念。つーか前世の記憶が殆ど無い事に今気が付いた。

幼少期、学生時代、社会人だった頃の記憶がまったく無い。自分の名前すら覚えてないのだ。にも関わらず女運に恵まれてなかった事はちゃんと覚えてやがったよ、こんな悲しい記憶なんて忘れていて欲しかったと思うよまったく。

そんな下らない情報は兎も角、あたしの戦闘力が判明しましたー!!

戦闘力は５００!!ピッコロ大魔王とほぼ互角ですよこの歳で!!

因みにあたしの両親はエリート戦士らしく、二人の血を引き継いだらしい。潜在能力もかなりのもので、王族と引けをとらないとか。

でも、まあ、ブロリーは戦闘力１００００とか言う化け物だし、悟空の事もあるから油断はできない。

頃合いを見たら逃げよう。原作とは関わりたくないけどバーダックと友人関係にはなりたい。悟空やブロリーの顔も見てみたいし。

まあ、もう悟空が産まれている可能性は有るけどね。兎に角、今は前向きに生きよう。当面の目標は強くなって生き残ること。欲を言ってしまえばZ戦士のように気の扱いもマスターしておきたい。

これに関していえばフリーザから逃げ切れたら覚えても大丈夫だろう。

早く成長してくれないかな、赤ん坊のままだと寝るか考えるかのどちらかしかやることないから暇すぎる。サイヤ人達の会話を聞こうにも侵略した惑星の話とか戦いに関することばかりで聞き飽きてしまった。

ほんとあいつらって戦闘に飢えてんのな、ゲーセンに行く感覚で戦いに行くんだから正直に言って頭おかしい奴らばっかだ。

そう言えば最近、あたしの成長速度がちょっと早くなっているような気がする。

様子を見に来るサイヤ人は何も言わないから大丈夫だろうけど、この保育器もどきにずっと入れられているけど狭く感じてきた。

忘れてたけどあたしの名前ってまだ聞いてないよな。いったいどんな名前だろうか？

両親はあれ以降、一度も来たことがない所為で自分の名前すら分からない。放任主義にも程があるだろ、あの二人は・・・。

もう考えることがないから寝る。

第二話

どーも女サイヤ人に生まれ変わったキューカです。この度あたしは3歳になり、成長促進剤のお陰で5歳児と同じ体格まで成長しました。

道理で成長が速いと思ったよ、話を聞く限りだと生物の成長速度を一時的に速くする代物らしい。なんでも一秒でも早く戦地に出したいとかいう理由で子供の下級戦士に投与されるとかなんとか・・・。

実を言うと両親に捨てられました、はい。どうやらあの二人は夜の行為が激しかった所為で、うっかりあたしが誕生してしまった訳だ。んで、あたしの育児が面倒だと感じた二人はありとあらゆるコネを使い、あたしを下級戦士にランクを下げたのだ。

最低な親であるけれども、前世でちょっとだけ知っていた事だがどうもエリート戦士は中間管理職的な仕事をやらせられるらしく、あたし個人としては誰かの下で働いた方が楽だ。

その上、エリート戦士のなんたるかを教育されるらしく元からこう言うのが苦手なあたしからすればかなり嬉しい。

しかし、まあ、下級戦士となったからには子供でも容赦無く扱き使われる。戦闘力は

エリート戦士とは言え、今のあたしは下級戦士だ。ある程度戦える体格まで成長した今、あたしは転生してから僅か数年で手頃な惑星へ飛ばされてしまった。

「ギギギ!ギギギギギ!」

「ギギ?ギギギギ、ギギギギギギ!!」

目の前に居る二匹の昆虫型異星人は何を言っているのかさっぱり判らない。アタックボールから出てきたらこの惑星の住民が様子を見に来たようだ。しかし、ナメック星人やフリーザの一族、サイヤ人とかは地球人と話せるのは一体何故なんだろうか?

そんな疑問は兎に角、この二匹の戦闘力を測ってみるとするか。

「戦闘力は・・・ふっ、二匹ともたったの1か。ゴミめ」

嘘ですごめんなさい、ゴミじゃないです。ただ言ってみたかっただけなんです。ラディッツの名言を言ってみたかったんです!

あたしの戦闘力と比べれば確かにゴミなんだろうけれども、命の重さはあたしと同じだ。だけど生きる為にこの惑星の住民には悪いけど死んで貰う事にする。

何せ簡単な戦闘技術を教わった時に、下級戦士達は惑星の侵略で給料が支払われると聞かされたのだ。それは子供でも同じで、侵略しなければ野垂れ死んでしまう。

何このブラック企業、国家規模でやるから逃げ場が無いんすけど。早く辺境の惑星に逃げたい・・・地球は論外。無印なら兎も角、サイヤ人やフリーザ、セルに魔人ブウが

来るから却下一択でしょ。
「あまり殺したく無いけど・・・バイバイ」
何やらあの二匹は生存本能が働いたらしく、一目散に逃げていった。無論、逃すつもりは一切無い。
出撃前にグミ撃ちと溜め撃ちは習得してある。まだグロ耐性がない今、溜め撃ちであの二匹を殺そう。
そう思いながらあたしは逃げる二匹へ手を向けた。
「はぁぁぁぁぁ!!!!ハァッ!!」
青白いビームと轟音と共に射線上の地形諸共、昆虫型の異星人は消滅した。
あの威力だと二匹以外にも巻き込まれたかも知れない。贅沢を言ってしまえばあの二匹を消し去る程度の威力まで抑えたかったが、経験不足な現状致し方ないだろう。
「生きる為とは言え、殺すのは気分悪いなあ」
ポリポリと頭を掻きながらあたしは二匹を殺した手を見つめた。
一瞬の出来事だったが、今確かにあたしは命を刈り取ったのだ。この行為を楽しむ奴は少し頭がおかしい奴かもしれない。こういう世界、種族に産まれてしまったのだから受け入れなければならない。
「どれだけ人を殺そうが、あたしは絶対に外道に堕ちたくないなぁ」

あたしは今を生きる人間だ。他の命を奪わないと生きていけない矮小な人間である事を自覚しなければ、あたしはあたしで無くなる。抵抗してくる者には尊敬を、逃げ惑う者には感謝の心を持とう。

「本当にこの世界って、残酷だなぁ・・・」

摩訶不思議なこの世界は、あたしにとって残酷すぎた。産まれて数年の子供が惑星を侵略の為に送り込まれ、弱者は強者に命を乞うしか方法がないこの世界が・・・。

あたしも強者から身を守る為に強くならなければならない、弱者を喰らいながら・・・。

「強くならないと・・・」

地平線の向こうから現地の軍隊が陣形を組みながら向かって来る。

この世界は、平等では無い。

強くなる為に、戦おう。彼らを尊敬しながら皆殺しにしよう。

それがあたしの、罪の償い方だ。

「安らかに眠って頂戴」

先程の溜め撃ちではなくグミ撃ちの構えをとる。

溜め撃ちと違ってこの攻撃方法は少し難しい、だが体がエリートサイヤ人のお陰ですぐに会得する事ができた。これがあたしの才能なのだろう。

イメージするのは砲兵隊による大規模な面制圧砲撃。

スカウターで計測する限りだと、彼らの規模は相当なものだ。それなりの体力を消費するだろう。

「スー、ハー。くらえぇぇぇ!!!」

大量のエネルギー弾が弾道を描き、現地軍へと降り注ぐ。この世界の基準ではひ弱な攻撃であるが、彼らからしてみれば凶悪すぎるだろう。

爆発音と異星人の断末魔があたしがいる場所まで聞こえてくる。弱い、が彼らの声は確実にあたしの精神を蝕むだろう。

この声をしっかりと頭に焼き付けなければならない。そうすればあたしは少なくとも外道に成り下がる事はないだろう。

「あたしは、これからこんな仕事をせにゃならんのか・・・」

エネルギー弾で耕された大地を見ながら呟いた。

生きている者は誰一人居ない死の大地。戦車や装甲車の残骸が点在し、原住民の焦げた臭いがあたしの鼻をついた。

彼らの中には恋人や家族がいただろう。守りたい者を守れなかった無念が加害者であるあたしにも痛い程伝わった。

「グロ耐性は無いと思っていたけど案外、大丈夫な方だったか?あたしは」

寧ろ殺生の喜びを感じている様な気がする。多分、これがサイヤ人の本能なのかもしれない。

あたし自身の意思なのか本能なのかは判らないけど良い気分にはなれないなぁ。快楽殺人鬼になるつもりは毛頭無いから余計にやな気分になってしまう。さっさとこのクソみたいな仕事終わらせて早く帰りたい。

「近くの街へ行こうかと思ったけどこれじゃあ、なあ・・・」

最初に殺した二匹の事もそうだったが、惑星の地形を破壊し過ぎたと思う。幾ら出撃前に戦闘の基本を教わっていたとはいえ、この調子では惑星全体がクレーターだらけになってしまうだろうし、威力の調整も必要だろうなあ。

気が進まないけど、あたしが明日を生きる為に必要な仕事だし手加減を覚えないと。０か１００のどちらかしか出せない攻撃じゃあ、今後の為にも決して良いとは言えない。

征服が終わるまでの間は、手加減を覚える事があたしの最初の目標にしよう。打撃系の攻撃も併せて手加減を覚えておこう。

「えーっと、ここから生体反応がそこそこある場所は・・・」
ここら南東へ百キロ程に人口が1万人強の反応があるな。よしっ、あそこを最初の標的にしよう。
それにしても、このスカウターは便利な物だ。戦闘力の測定は勿論、惑星の簡単な地図作成に加え、原住民の人口分布やＩＦＦまで搭載されているもんだから前世の地球より圧倒的に技術が進歩しているのが一目でわかる。
確かスカウターって元々ツフル人が作った物なんだっけ?.詳しい事は分からないけどそう言う話を聞いた事がある。
「ここ星の原住民には悪いけど、あたしの修行相手になって貰うよ」
キューカは原住民の都市が存在するであろう方向を見ながら呟き、飛んで行った。いつか惑星ベジータを抜け出し、辺境の惑星でのんびり修行しながら生活してやると彼女は決意した。
目的まで辿り着く道のりは血で染められた道かも知れないが、決して命を弄ぶ様な真似はしないと自分が信じる道を彼女は歩むだろう。

第三話

キューカがこの惑星に降り立ってから早くも半年という時間が過ぎ去った。その間、キューカは幾多もの都市や村を襲撃しながら自らの力をコントロールする修行を続けていた。

半年の間で彼女は力の制御が可能となったものの、戦闘力の向上は産まれてから僅か百程度と言ったものだった。

「幾ら何でも張り合いがなさ過ぎるんだよなあ・・・」

確かに初めての惑星侵攻にうってつけの星なんだろうけど、思った以上に敵が弱過ぎる。数だけが取り柄で鬱陶しいだけだから、修行相手としてみれば満足できないよ。

しかもあの弱さを補うかのように、影からネチネチと攻撃して来るから余計にたちが悪いったらありゃしない。

そこら辺から持って来た椅子に座りながらキューカは溜息を吐いた。力のコントロールという目的が達成された今、この惑星にこれ以上留まる理由は無い。

勿論、現地住民の絶滅という本来の目的は忘れていない。しかしこのまま放って置いても絶滅は時間の問題だろう。

「真正面から戦っても良いんだけど、ちょっとした運動にしかならないから無意味なんだよなあ」

面倒くさいから工場地帯やインフラ、農場を破壊して回ってたら、急に大人しくなったか拍子抜けしてしまった。いや、まあ、当然と言っちゃ当然なんだろうけどこの世界の地球の様にズバ抜けて強い奴がいないから退屈だよまったく・・・。原住民の位置を探っても全員、地下に潜って一向に出て来る気配はないから暇だ。

食料が尽きた順に生き残った集落が消滅するので、このままのんびりしていても問題無い。原住民は圧倒的強さを持つキューカに対し、核兵器や生物兵器を使った惑星規模の焦土作戦を展開したが、それも一週間程度でそんなやり方が見られなくなってしまったのだ。

力のコントロールが可能になったのは2ヶ月前の事で、今はより繊細に制御する方法を模索している状態が続いているだけだ。偶に都市の再建を図る動きを見せたが、彼女はそれを徹底的に阻止し続け、今は虫の息だ。

「あー、最後の集落の生体反応が減り始めたな」

数の減り具合から見て差し詰め、食糧の奪い合いが起きたんだろうな。最後は自分達で争い合って滅亡するとか・・・前世の地球でも有り得そうだから笑えなさ過ぎるんだけど。

「そろそろ止めを刺しに行こうかなっ、と・・・」

キューカとしてはこのまま放って置いても構わなかったが、万が一という可能性がある。初仕事で失敗してしまった場合、彼女に良い仕事が回される可能性が低くなるかもしれないのだ。

それだけは何としてでも回避しなければならない、食って生きる為にもこの仕事はかなり重要だ。ここで失敗してしまえば、彼女が惑星になるべくダメージを与えないで侵略した努力が水の泡になってしまう。

手に持っていた缶ジュースを投げ捨てると、キューカは生き残りがいる場所へ向けて飛んで行った。

「うわぁ、これは酷い」

止めに刺しに来たは良いけど、ここまで酷いとは思わなかったな。こいつら、あたしが来たことに全然気付いていない様子だし共食いまで始めていやがる。更に壁に飛び散る紫色の血が、ある種のホラー映画を連想させるから余計に酷いぞ。

「ギギー！」
「ギギ、ギギギギギ！」
「うん、日本語でおｋ」
　ここに来て半年経つけど、相変わらず原住民の言葉が分からない。絶滅寸前だから覚えなくても大丈夫だろうけど流石に他人とコミュニケーションをとりたい。でも同年代のサイヤ人って結構、気性が荒かったしあまり話しかけたくないなあ。
　うーん、前々から思ってたけどあたしってボッチになるかもしれない。
　原住民の争いを前に、キューカは自分の将来に僅かながら寒気を覚えた。自分の性格はサイヤ人と気が合わないと解っていても、流石に友人の一人や二人を欲しがるのが普通だろう。
「戻ったら誰かに話しかけよう、そうしよう」
　友達になってくれそうなサイヤ人って居なそうだよなぁ。出発前にちょっと話したけど、あいつら原住民をどう痛めつけるか考えた上に良い女が居たら孕ませて殺してやると豪語してる奴も居るし、無理かもしれない。
　子供だからもっと可愛らしい考えを持ってくんない？お願いだから。
　ん・・・、後ろに一匹だけ原住民が居るね。あの様子じゃ、あたしが来ることにいち早く気付いていたみたいだ。

「ギギー!」
「背後から攻撃とは状況から見て大したものだけど、相手が悪かったね」
この手の攻撃は結構あるからいい加減慣れて来た。最初はモロに受けてしまったけど、サイヤ人特有の頑丈な身体のお陰で無傷で済んだけど。
とはいえ、戦闘力の差が絶望的なのに戦いに挑んで来る度胸は尊敬できるな。あたしもいつか、この原住民みたいに力量差がかけ離れている敵と戦うかもしれない。
今考えても仕方がないか、その時はその時に考えるとしよう。
「さて、ここは一気に殺った方が良いよな。せめて痛みを感じさせない様に殺さないと」
初めて来た時と状況は似ているけど、今回はあたしの存在に気付いていない様子だ。溜め撃ちの力加減は、全力の十分の一位にしてっと・・・。
「さようなら」
極太のレーザーが原住民たちを飲み込み、彼らを細胞一つ残らず消し去った。スカウターにある反応はあたし一人のみ、ようやくこの惑星の侵略が終わらせることができた。
しかし、力の加減が出来る様になったとはいえ意識しないと調整出来ないから改善しないと。戦闘中にこんな事してしまえば隙だらけだろうし、早めに改善したい。
「んー、ふぅ。やっと帰れるよ。今から戻っても早すぎて驚かれるだろうし・・・。ま、

いっか」

聞いた話だと初出撃の下級戦士は基本的に二、三年程征服に時間がかかるって聞いた事ある。あたしの戦闘力もあるけど半年は流石にやり過ぎたかも、でも戦闘の基本は出来ているから大丈夫かなぁ。

惑星ベジータに到着する前に技でも考えて置こうかな。イメージは、そうだなぁ・・・グレネードランチャー見たいに気弾が着弾と同時に爆発する奴にしておこうかな。

「戻ったら技の開発をやろっと」

あー、マジで楽しみ。思い立ったが吉日、早速帰ろうか！

??

キューカが惑星ベジータへの帰路に就いている頃、彼女の報告を受けた一人のサイヤ人は困惑を隠せなかった。

理由は勿論、キューカが惑星を制圧する速さだろう。なんせ、僅か半年という短い時間で原住民の抹殺を成し遂げたのだ。それが大人のサイヤ人なら話は解るが、キューカはまだ子供、しかもこれが初めての出撃なのだから困惑するのも無理はない。

「しっかし、どう上に報告しようか。これじゃ信用なんてしてくれないぞ・・・」

かの惑星の文明はそこまで大した規模ではないが、幾ら何でも速すぎた。更に報告によれば惑星そのものに対するダメージは必要最低限に抑えられており、誰もこの戦果が

キューカだと信用しないだろう。仮に彼が報告を受ける立場だったのなら、信用せず虚偽の報告として受け取るだろう。そこまで彼女が挙げた戦果はとんでもないものなのだ。

キューカの出自が気になったサイヤ人は、彼女に関する情報を軽く調べる事にした。

「あのガキ、エリート戦士の両親を持っていたのか。そりゃあ、あの惑星を短時間で征服できるわな」

キューカの戦闘力は両親の遺伝子を上手く引き継いだようでかなり高めだった。それならあの時間で征服できるのは納得できた。惑星に対するダメージは偶然が重なり合った結果だろう。

「にしても何でエリート戦士のガキをわざわざ下級戦士にしたんだ？将来有望そうなのに意味が分からん」

これ以上、不要な詮索をやって下手な不信感を持たれる可能性もあるのでこれ以上な事はしないつもりだが、やはり疑問に思う所はあった。

大方育児が面倒臭いという下らない理由だろう。

「勿体無い事してんな、あのガキの親は」

キューカの戦果次第で出世するかもしれないのに、二度とないチャンスを自らの手で手放すのは頭が可笑しいのではないかと彼は疑ってしまった。

「早く報告書に纏めねーと。はぁ、めんどくせえな」

そう一人ごちりながら彼は報告書の作成に取り掛かった。ついでにキューカが挙げた戦果の確証を得る為に、付近のサイヤ人に確認させる等の要請を出しながら自分の上司をどう納得させるか頭を回転させるのであった。

第四話

帰路の途中、あたしは目を覚ました。
アタックボールの中は薄暗く、娯楽のような物は一切ない。特に眠気が無いあたしは窓の向こう側に広がる景色を眺めることにした。
凄まじい速度で近隣の惑星を追い抜く光景は、正に幻想的であった。前世における地球とは隔絶した技術を目の当たりにした時、あたしは別世界に来たと改めて実感したものだ。
だが、いくら幻想的で美しくともあたしの胸中はもやもやとした複雑な感情が渦巻いていた。
「本当にあたしは・・・サイヤ人になったんだな・・・」
ポツリと自分でも聞き取れるかどうか分からない声音で呟いた。侵略途中はフワッとした記憶で思い出してもまるで、夢を見ていたと思えばしっくりくるんだが、時間が経つにつれようやくあたしは事の重大さに気が付いた。
「殺し、たんだ・・・」

微かに震える手を見た。小さく可愛らしい手だが、あたしは一体どれだけの生命を奪った？

気合いで、気弾で、エネルギー波で、拳で、平手で・・・。容易く消えるその生命を見てあたしは何を感じた？

爽快感だ。無双ゲームをプレイした時と同じ感覚、人殺しをゲーム感覚で楽しんでいた。

「あああ、あたしは・・・」

相手を尊敬して殺そうと誓った。罪なき人を殺した事を忘れないように誓った。

だが、結局は――――

「薄っぺらい自己満足だって言うのか・・・」

殺す事を楽しんでいた自分に、絶望した。

心の何処かであたしは他のサイヤ人達を見下していたのかもしれない。あたしはあいつらとは違う、あたしは特別だと無意識に見下し、それを隠す為に高説を垂らしていたのだ。

「ああ、あぁ・・・!!」

怖い。あたしが、自分自身が怖くて堪らない。

頼れる人間が居ない、不安を全て吐き出せる人間が居ない。自分には味方がいな

い・・・！

怖くて怖くて怖くてコワクテコワクテコワクテコワクテッ!!

――モウイッソノ事、楽シメバ？

「!?!?!?!?!?」

その瞬間、背筋に冷たいナニが冷たい流れたような感じがした。

突如として脳内に響いた甘美でとても魅力的な囁きに、あたしは思わず身を任せそうになった。

「な・・・に・・・今、のは？」

頭の中に誰かの声が響いたような気がした。あたしの弱みに付け込むかのように、まるで恐怖に押し潰れそうな所を待っていたかのようなタイミングであの囁きが聞こえた。

あれが、なんなのかは勿論判らない。だから対策のしようもないが、少なくともあの声はあたしを別の方向へ向かわせようとしていたと思う。

「もう、考えるのは辞めよう」

だが、今のあたしにどうする事もできない。解決策など幾ら考えても見つからず、どうしようもできないからこれ以上考えても時間の無駄だろう。

今あたしが出来ることはただ一つ。耐えて、耐えて、耐え続けるだけでいい。それが、

あたし自身を守る事が出来る最善だと思いたかった。
ブー
そう言えばあと少しで到着するとか言っていたな・・・。
最悪だ、こんな気分が悪いタイミングで惑星ベジータに着いてしまうとか今日は最悪の日だ。
「はあ、着いたらどうなるんだろ」
出来れば出迎えが居ない方が助かるけれども、他の連中より明らかに早い帰還だからそこそこ野次馬が居るかもしれない。流石にそれは有り得ないと思いたいけど、彼らの性格じゃああありえるかな。
「めんどくさいなぁ」
彼女は心底面倒臭そうな表情で呟き、ガラス越しに見える惑星ベジータを見ていた。

アタックボールのハッチが開き切ったのと同時に外に、ゆっくりと出て行く。
久し振りに踏んだ大地を堪能しながら辺りを見渡すした。そして案の定、あたしが予想していた通り、着地場に野次馬が群がって来ていた。
数は約４０人程、どれも連中の戦闘力は平均して１００ちょっととあたしより格下ば

かりだった。
「あのガキが半年で惑星を征服したのかよ」
「チビの癖に戦闘力が８００もありやがる、誰の子なんだ?」
ハッキリ言って居心地が悪すぎる。
そもそもあたしが住む区画の平均戦闘力は１００前後に対し、今の戦闘力は８２３もある。所詮、最下級戦士用の区画を割り当てられた割にあたしの戦闘力が高過ぎるのだ。
「・・・チッ」
ハッキリ言ってあたしには関わらないで欲しい。途中までは友人の一人を欲していたのだが、サイヤ人を改めて見るとその願望は無くなった。
好奇な目で見られ、その目には僅かな嫉妬と敵意が見え隠れしていた。幾ら何でもわかり易すぎる。
通路を塞ぐ形で群がる奴等に軽く殺気を送らせて見れば、まるでモーゼの海割りの様に道が開いた。
「ガキの癖に・・・」
「全員で襲えば行けるか?」
「馬鹿、死にたいのか」

「生意気なガキだな」
彼らの顔は屈辱による怒りで今にも襲いかかりそうな雰囲気を漂わせていた。それでも尚、彼らが凶行に走らないのはキューカと彼らとの戦闘力の差があまりにも開き過ぎている事に起因する。負けると分かっていて態々戦いを挑む程、彼らは愚かではない。
対するキューカは、澄ました顔で歩いて行った。幼いながらも強者である事を利用し内面を悟られない様、細心の注意を払いながら寝床へと歩いて行った。
そして人の気配が感じられなくなった場所まで来た時、彼女は盛大な溜め息を吐いた
「アイツらと関わり合うと絶対碌な事にならないよな」
あくまであたしの勘ではあるけどあながち間違ってはないと思う。なんせさっきの連中、戦意を隠しているつもりだったと思うが素人のあたしですら敵意を感じる事ができたし。
はあ、出発前の気楽だったあたしをぶん殴りたい気分だ。まあ、兎に角何事も無かったからそれで儲けもんだと考えた方が良いか・・・。
「一週間後にまた出発せないかんし本当、サイヤ人って面倒臭いなぁ・・・」
再び溜め息を吐いた彼女は帰還途中の一件もあり、食欲が湧かず、一粒飲むだけで一食分の栄養を賄える錠剤で食事を摂る事にしたのであった。

第五話

「これは、思った以上に酷いな・・・」

数分前まで都市があった場所を歩きながらあたしは呟いた。

見渡す限り全て荒野、文明の痕跡は僅かに残った瓦礫しか残っていない。これをあたし一人でやったのだから、ドラゴンボールの世界がどれだけヤバいのか再確認する事ができた。

同じことを既に五回はやっているが、やはり今は殺しをしたと言う実感は湧かない。だが、以前の様な高揚感は一切感じなかった事を見ると、少しは成長しているのだろう。

「しっかし、これだけやっても売る時の影響が少ないのは驚いたな」

どうやら買い手は惑星さえ手に入ればどうでも良いのか、よほどな事が無い限り安値にはならないらしい。むしろ逆に高く売れるのが多いとか。

まあ、あたしにとって関係のない話だが。

「もしこの惑星に来たのがあたし以外のサイヤ人なら、これ以上に酷くなりそうだ」

あいつら一人一人殺すのが楽しいらしい、食堂でそんな話を嫌と言うほど聞いたからもうウンザリだ。戦闘と殺戮ばかりを好むからフリーザに滅ぼされたんだ。いい加減

学んで欲しいよまったく。
今のところフリーザはサイヤ人を滅ぼすような気配は一切感じられない。逆にサイヤ人達をこき使うのに夢中でならない節も感じられた。
「まずどうやって逃げ出すかだよなっと――おー、結構飛んだな」
足元にあった石を拾い上げ、何気なく投げた。投げられた石は瞬時に音速の１０倍以上の速度に達し、空の彼方へと消えていく。それを見ながら彼女は思案する。果たしてどうすれば脱出出来るのかと。
アタックボールを盗んで逃げ出す手もあった。しかしそれをフリーザ軍は見逃すはずがなく、すぐに追手を送るだろう。
バーダックの反乱に乗じて逃げる手もある。だが、その手を使うためにはバーダックの行動を把握してなくてはならない為、実現は極めて難しい。
「八方塞がりだなこｒｙ――ん？」
視界の端で何かが動いたような気がした。
スカウターで計測すると、そこには戦闘力０．１という数値が表示されていた。それを意味するのは生存者が居る事、キューカの都市を荒野に変えた攻撃の中、奇跡的に生き残った人間が居た事に彼女は少し驚いた。
「こいつは、子供か？何故生き残ったんだ？」

疑問は残るが唯一の生存者である子供は酷く衰弱しており、今にも死にそうだ。性別は女の子かもしれない、彼女は焦げた人形を手にしており、瀕死で死にそうになりながらも人形だけは離さないという意思を感じる事ができた。

「悪いけど、これは生きる為なんだ。あの世であたしを恨みな」

キューカの指から放たれた光線が少女の頭を貫き、即死した。

苦しませて死なす必要は無い。苦しまず殺す事がキューカにとって唯一の謝罪でもあった。

この人形はきっと親から貰ったんだろうな。それだけ大事にしてたんだ、こいつの親はとんだ幸せ者だ。

せめて、埋めてやらんと・・・。

少女の墓の前でキューカは手を合わせて静かに座って居た。

何故自分がサイヤ人として生まれたのか、何故自分は他のサイヤ人のように凶暴な性格を持たないのかと考える。

答えは出ない、しかしキューカにとってそれはどうでも良かった。何となくだが判らない方がいいと感じたからだ。

ピピッ

スカウターから高い戦闘力を持つ生物が接近する警報が鳴った。

数は一、戦闘力は５４０だ。

「戦闘力５４０、こんな奴がこの星に居たとは・・・」

彼女の背中に冷たい汗が流れる。戦闘力そのものは彼女より低いものではあるが、キューカにとってこれが初めての本格的な戦闘となるのだ。

ここは一旦逃げる手もあるが、その考えはすぐに消え失せた。

「面白い・・・！」

初となる強敵の出現により、彼女の中に眠るサイヤ人の血が大いに震えた。楽しみで楽しみで仕方がない、早く来てくれと言わんばかりにソイツが来る方向を睨む。

「来た」

凄まじい速さでソイツは飛んで来た。

地面スレスレの状態で土煙を巻き上げて飛ぶソイツを見た時、キューカは口元に狐を描いた。

彼女はここで理解した。サイヤ人としての己が戦闘を求めている事に、強敵との邂逅

を求めている事に。
「随分と派手な登場だな」
「まさかだとは思うが、これをやったのは貴様か？」
「だとしたらあんたは、どうするんだい？」
キューカの挑発めいた口調に奴は青筋を立て、静かに構えた。それを見た彼女もまた構える。
「我が名はキドゥ。貴様の名は？」
「これからあたしとあんたは殺し合う中だ。互いの名前を知ってどうする？」
「ほざけっ！」
先に攻撃を仕掛けたのはキドゥの方からだった。
彼は強く地面を蹴り、キューカに肉薄する。しかし当の彼女は微動だにせずただじっと立って居るだけだった。
――――好機っ！
手先を鋭くナイフの様にし、キューカの心臓目掛けて突いた。
「何っ!?」
しかし彼の突きは虚しく空を斬る。キドゥにとって意表を突いた一撃が、いとも簡単に躱された事実に驚き、彼に僅かな隙が生まれた。

それを見逃す程彼女は優しくはない。キドゥの脇腹に彼女の拳が迫る。
「グハァッ!」
彼は気付いて居たものの時既に遅く、回避する間も無くキューカのボディーブローをモロに受け、勢いよく飛ばされた。
キューカは間髪容れず肉薄し、右手にエネルギーを溜めた。
「舐めるなよ餓鬼!」
キドゥはエネルギーを溜めて居た彼女の右腕を掴み、地面へと叩き付ける。
彼女の周囲に小さなクレーターが作られ、そこへ更に攻撃が加わった。
顔面に五発、腹部に三発、胸に六発と殴られ、彼女は半ば意識を失いそうになる。
「ハァッッッッ!」
気合いだと言わんばかりに体からエネルギーを放出し、キドゥを弾き飛ばした。
ゆらゆらと片手で頭を抱えながら彼女は立ち上がり、キドゥを見るとニヤリと笑った。
「ハハっ、あたしもどんなに良い子ぶっても結局サイヤ人なんだな」
認めてやろうじゃないか、あたしもサイヤ人の端くれだと言う事に。憧れとかカッコいいとかじゃあない、楽しいから強くなる。楽しいから戦う。
だから、もっと上を目指したい。ベジータ王を超えて、フリーザを超えて、セルを超

えて、破壊神を超えて、孫悟空を超えて・・・。あたしは更に上に居る連中と戦いたい！

「だから、手始めにアンタを超える」

さっきの戦いで分かった。キドゥとか言う奴は戦闘力だとあたしの敵ではないが、それを補える分だけの技術を持っている。

だから奴はあたしと互角かそれ以上だと考えて戦えば良い、奴程度を超えなければ破壊神を超えるのは夢のまた夢だ。

「さあ、こっからまた始めようか！」

彼女の声を皮切りに、二人の間で凄まじい攻防が展開されるようになった。

攻撃、攻撃、防御、回避、攻撃、回避・・・・・・。

これまでキューカが経験したことがないスピードで繰り広げる戦闘を、彼女は楽しんでいた。だがそれと同時に、彼女は己の戦闘技術の未熟さを思い知らされた。純粋なパワーとスピードで勝っていても技術の差で劣勢に立たされ、ダメージが少しずつ蓄積されてゆく。

「フハハハハ、それが貴様の限界か！」

「・・・・・・」

彼女は次第に防戦一方となり、一歩間違えればモロに攻撃を喰らってしまうところま

で追い詰められていた。だが、それでも尚、キューカはいつに無く冷静であった。
キドゥの動きをよく観察し、相手の癖や隙を凄まじい速度で頭に詰め込んでいた。一見して劣勢であるキューカだが、彼女からしてみればまだ始まったばかりである。
「そこぉ!!」
「グホオォ!?」
一瞬の事であった。キューカの防御が限界を迎える直前、キドゥが止めとばかりに大きく拳を振りかざした直後に彼の動作は中断された。代わりに彼女の拳がキドゥの腹部に食い込んでいたのだ。
小さくとも重いキューカの一撃は、キドゥに大きなダメージを与えた。この時点で既にキューカの姿はボロボロであったものの、彼女の表情は何一つ変わってはいない。
「あ、ががが・・・」
胃液を撒き散らし、腹部を抱え込んだキドゥに対しアッパーを加えた後、力一杯殴る。殴り飛ばされたキドゥは１００ｍ以上飛ばされ、最終的に岩に追突してようやく静止した。
だが、彼女の攻撃は終わらない。腕を伸ばし、手の平で照準を合わせた彼女は叫ぶ。
「フル――――」
この惑星に送り込まれる一週間の間、彼女は何ものんびりとしていた訳ではない。か

めはめ波やギャリック砲をイメージに編み出したキューカ独自の技、今後己の必殺技として使うだろう技を今放とうとしていた。
赤白いエネルギーの塊が作られ、徐々に大きくなっていく。
「――――バーストォオ!!!」
半径1m弱のエネルギー波が猛スピードでキドゥに命中し、巨大な爆発が起きた。
土煙が巻き上がり、キドゥにダメージを与えたのかすら分からない。それでも彼女は立ち登る土煙の中へ突入して行く。煙の中で戦闘の音が荒野中に鳴り響き、太陽の日の光によって二人が激しい殴り合いが影となって現れた。
やがて煙は晴れ、キドゥの姿は見るの無残な程にボロボロに成り果てていた。身体中の至る所から血が流れ、左腕は骨が剥き出しになる程に折れている有り様だ。
もはや、彼に戦闘を継続できる力は持っていない。対するキューカはかすり傷を負っているだけで、大したダメージを受けていない様に見えた。
既にこの戦いの勝敗は決したと言っても良いだろう。
「まだ戦うかい?」
折れた左腕を押さえながらも、未だ戦意衰えぬ目を見せるキドゥに対し問うた。
「無念・・・」
ただ一言言い残し、糸が切れた人形の様に倒れ伏す。

スカウターに表示される数値は0、即ち死を知らせるものだった。それと同時に彼女も糸が切れたかの様に座り込み、右腕を挙げた。

「ハァ、ハァ、なんとか勝てたぁ・・・」

キドゥとか言う奴、強すぎだろ。技術だけであたしと互角とか、凄いにも程がある。

ピッコロと悟空がラディッツに勝てた理由がなんとなく分かった様な気がする。アニメじゃ一方的にやられている様に見えて、実はラディッツもキツかったのかもしれんな・・・。

「やっぱ、戦闘力だけじゃ生き残れないかぁ」

気のコントロールだけじゃない、技術も重要だと言うことを身をもって教えられた戦いだったな。今回の戦いで学ぶ事も多かったし、とても有意義な日になったなぁ・・・。

「それと、やっぱり最終目標はスーパーサイヤ人4にしようか」

純粋にあの姿が好きだ。前世だとゴッドやブルー、身勝手の極意とか出てきたらしいけど、やはりスーパーサイヤ人4が一番好きだ。

やり方は分からないけど尻尾は残して置こう。

彼女はとても満足した表情で横たわる。サイヤ人の特性の一部をあえて受け入れ、己の趣味にしようと心に決めながらその場で眠りについた。

第六話

サイヤ人はその種族柄、仕事から帰還した直後に再び惑星の侵略に駆り出されると思っていたのだが、どうやら違ったらしい。暇なのだ、この最低でも一か月の間はあたしに仕事が来ない。

給料や報酬で一年近くは余裕で過ごせるだろう。実質的な長期休暇にあたしは驚いたが、暇なのだ、あまりにも。長期休暇が始まって今日で15日目の昼、あたしは行き詰っていた。

始めは基礎トレーニングや技の開発に時間を潰していたのだが、どうしても暇になってしまう。ただそこは耐えて少しづつ強くなるものだが、如何せんあたしは元々の素質のおかげで強くなっている節があるのだ。戦闘力と技量の差にギャップがありすぎる。

「さて、どうしたものか・・・」

修行をやろうにもまず何を始めたらいいのか分からないに加え、そもそもが教えを乞う様な人間が居ないのだ。全てを自力で鍛えなければいない現状、一番効率的に強くなれる方法は実戦を積む方法以外無い。

「そうだ、クリリンと悟飯がやっていたイメージトレーニングをやってみてみるか」

たしかにアレは使えそうだ。ナメック星に向かう時以外には見た記憶はないが、それでも何もやらないよりかはマシだろう。
だが、あたしの想像力だとできるものなのか?それ以前に強い奴と言えば、以前戦ったキドゥ以外に居ないし・・・まあ、試して見るか。
「・・・・・・・」
集中集中、確かキドゥは鶏みたいな顔で、鳥と人間のキメラみたいな奴だったな・・・なんかフライドチキン食べたくなってきた。
最近は栄養剤以外口にしてないし、そろそろまともな飯が食いたい。
「だけど、あたし以外のサイヤ人とは関わり合いたくないんだよなあ」
どうしても気が合いそうにも無い、聞くたびにどんな殺し方が良いかで談義してるんだ。元日本人であるあたしからしてみればその会話には入りたくは無い。
こうして見ると孫悟空がかなり性格が良いのかが分かる。・・・ニートでよくあの世に行くけど。
あーやばい、色々と脱線してた。
「・・・・・・・」
集中集中、キドゥの動きを想像しろ・・・。
「・・・・・・・ｚｚｚｚｚｚｚ」

ｚｚｚｚｚｚ・・・ハッ!?。

「・・・いや無理だろ」

クリリンの奴どうやってアレやっているんだ?悟飯も悟飯で何適応しちゃってんの?君一年前まで戦闘のせの字も知らなかったやん・・・。

「はあ、これは諦めるしかないか・・・」

あたしは溜め息を吐く事しか出来なかった。右も左も分からない状態で技術を上げるのはやはり至難の業、やはり実戦で腕を磨く他に方法は無いだろう。

「身体を鍛えるか」

それなら手段は沢山ある、ドラゴンボールの修行法として有名なのが悟空とクリリンがやった修行法――――

「こっこ一面耕すか」

見渡す限り全て荒野、人里から１０ｋｍ離れた場所だがまあ問題はない筈だ。特に範囲を決めてはいないが、まあ大丈夫だろう。亀仙人の修行法ではあるが、何もやらないよりは真似した方が良いだろう。

「やるか」

出来れば重りが欲しい所だが、無い物を強請っても仕方がない。惑星ベジータの重力がその代わりと考えればいいだろう。

このやり方がそれ程の効果があるのか、見ものだな。
??
惑星侵略に於いてフリーザ軍は二つのパターンに分けられている。
一つは通常戦力を用いた侵略、一つは戦闘力が一定以上超えた戦士を向かわせるのがある。フリーザ軍は全宇宙の制覇を主目的と定めており、戦闘力が数百以上の戦士を数多く所属しているが何せその絶対数が少ない。
個がいくら強くとも数多くの人間を支配、征服するのに限界が来るのだ。そこでフリーザ軍は数を補うために地上軍を保有している。
地上軍の構成員全員の戦闘力が一桁代と低いものの、彼らは地球とは比べ物にならない高度な兵器群を有しており、フリーザ軍の勢力拡大の一手を担っているのだ。
しかしそんな地上軍が手に負えない惑星が出現した場合、フリーザ直轄の部隊が動くことになる。地上軍と異なるかつ、地上軍とは比べ物にならない戦闘力を持つ部隊はフリーザ本軍いわゆるエリート集団で、フリーザに確実な忠誠を誓っている。あらゆる面に於いて優遇され、下っ端でさえ地上軍の大尉相当の権限を持っている。尚、原作で登場したフリーザ軍兵士がこの部隊に所属している。と呼ばれている。
形式上ではサイヤ人もフリーザ本軍所属とされているが、まあサイヤ人に与えられる仕事はあの有名な宇宙の地上げ屋こと原住民の抹殺だ。

とまあ、出発するまでの休憩の間にフリーザ軍について調べた内容だ。率直に言ってフリーザ軍はサイヤ人を見下しているのがひしひしと伝わってくる。だからベジータ王に反乱起こされたんだぞフリーザ、まあ直ぐに鎮圧されたけど。どちらにせよ、反乱は起きそうだし結果は変わりないか・・・。

だからフリーザはサイヤ人を滅ぼしたんだ、いくら戦力になり得ようとも厄介ごとの種を潰す為に。それまでにあたしは逃げ出さなければならないのだ。

「だが、どうやって？」

逃げ出す行為だけで見れば簡単だ。ただアタックボールで逃げ出せばいいだけの話だが、当然そう簡単にはいかない。

アタックボールに自爆コードを送信するだけで良い話だ。サイヤ人はフリーザの様に宇宙空間で活動はできず、現状だと不可能に近い。仮にそれが無くとも追手も考えなければいけない、気のコントロールができない今のあたしでは脱出するのは諦めた方が身の為になるだろう。

少なくとも暫くは修行に専念し、脱出の算段は後々ゆっくり考えるとしよう。

だがそれ以前に――――

「これは幾らなんでもやり過ぎだよなあ、あれ・・・」

あたり一面耕された大地を見ながら苦笑する。途中から楽しくなり、その勢いで昼食

も摂らずに日が暮れるまで耕していた。
だからやり過ぎだ。自分でも軽く引く程度にはやり過ぎている。
「ま、明日には元に戻しておくか」
彼女の小さな呟きが空へ溶けてゆく。
自分の将来に不安を抱きながら、どう生きて行くのか分からないまま修行した結果があれなのだ。
楽しかったのは自分で自分を騙す為のカモフラージュだったのだ。

第七話

七歳になった。

この歳になるまで十回以上の出撃を経験し、戦闘技術は相応程度には成長したとあたしは思う。格上との戦闘は片手で数える程度しか戦っていないが、死にかける事はあれどやはり強い奴と戦うのは楽しかった。

逆に力の無い人間を殺すのは以前と変わりなく、好きでは無い。だから仕事を早く終わらせる為に作業感覚でこなしていたら、フリーザ軍の連中はあたしの事を殺戮マシンと揶揄してきた。あんたらと違って、あたしは殺しを楽しんでないってのに酷い言いようだ。

今の戦闘力は３４００程度、身長も１５０ｃｍと両方とも成長している。ナッパの戦闘力まであと一歩、と言った所だろうか？

「さて、仕事に取り掛かるかな」

今回の仕事は普段と違い、やや特殊だ。いつもならあたし一人で侵略するのだが、今回はチームを組んでの仕事だ。なんでもこの惑星をフリーザが欲しがったのだとかで、あたし以外のサイヤ人の下級戦士が大量にこの星に来ているのだ。

なんせこの惑星は広い、とことん広い。サイヤ人一人では荷が重すぎるって言うのが、上の判断らしい。まあ、あたしはチームで連携する気なんて無いが。

「隠れているつもりだろうけど、スカウターで丸見えだ」

小さく呟き、彼女の視線の先には原住民が隠れている岩があった。油断しているキューカを奇襲で仕留めようと考えているだろうが、無謀な行為でしかない。隠れている原住民の数は三体、何れも戦闘力が１０００行くか行かないか程度だ。当然ながら、彼女の敵ではない。

彼女は次の敵をスカウターで探しながら、人差し指を向けた。指の先からレーザーが撃ち出され、三つに分裂した。その後、レーザーは三体の原住民の脳天を岩ごと貫いた。

この技は彼女が「バーストレーザー」と呼んでおり、主に原住民の処理を素早く行うために作った技である。

「ふうむ、ここから１０キロ先にリコ星人の集落があるようだ・・・まずはそこからやるか」

チラリと殺したばかりのリコ星人の死体を見たあと、彼女は集落がある方向へ飛んで行った。

この惑星はどうやら自然が豊からしく、木々が生い茂り森が地平線の彼方まで続いている。更に事前情報によれば地下資源が豊富で大量の希少鉱物を埋蔵しているらしい。あたしから見ればどうでもいい情報であるが、フリーザ軍に売ればかなり高く売れるだろう。しかし、注意すべきなのは戦闘力が数千を超えるリコ星人が確認されていることだ。

「彼処か」

集落の建造物は全て木造、住民の戦闘力も大きくて3程度と低い。アンテナが屋根にあるから文明レベルはそこそこと言った所か。

数は14体、気弾一発で十分だろう。

「――――これで良し。さて次は・・・警戒信号、戦闘力2300の奴が近付いてきている」

彼女はここで少し思案する。今この場所に近づいて来ているリコ星人をどう対処しようかと悩んだ。

いつも通りエネルギー波で処理するという手もあるが、やはり戦いたい気持ちもあった。しかし戦闘力にものを言わせて戦う奴が多く、技術も高い敵は少ないと言うのがキューカの経験だった。故に無駄な体力を使いたく無い彼女にとって悩む所なのだ。

「爆破が聞こえたと思えば・・・集落を襲ったのはお前か!!」

飛んで来たリコ星人の男の問いに無言で彼女は頷き、それを見た男は怒りの表情で殴

りかかる。
　男の攻撃を躱しながら彼女は溜め息を吐いた。
「皆の敵だ！このっ、このっ!!」
　所詮、この程度か。この手の台詞は始めの頃、心に来たが今ではもう聴き慣れてしまった。殺すのは今も好きじゃ無いが、それ以上に退屈してしまう。せめて、苦しまず殺してやろう。
「ぐあっ!?は、離せ!!」
「すまないな、これも仕事なんだ」
　そう告げた直後、男の首を刎ねた。刎ねた男の目は、あたしを酷く憎んでいる目をしていた。
　やめてくれ、そんな目であたしを見ないでくれ。あたしだってこの仕事を好きでやっていないんだ、生きる為にやっている仕事なんだ。
「はあ・・・次に行くか」
　早くこの仕事を終わらせたい、と思いながら彼女はこの場から飛び去って行った。
??
　十を超える都市と集落を壊滅させた頃、日が沈みかかっていた。
　そよ風があたしの頬を撫でる。風に乗った血の匂いが好きではないが、この風は好き

だ。不快になった気分を落ち着かせてくれる。
もしあたしに理解者が居てくれたのなら、どれ程いいものか・・・。しかしサイヤ人にはそんな奴は居ない、期待しても無駄なのだ。
「飯にでもするかな」
既に集めておいた薪に火を付け、風の音や火の音、自然の音をＢＧＭに目を瞑った。静かで、心が安らぐ音。あたしが一日の中で一番の楽しみとしているのがこれだ。
そろそろ携帯食を食べようと思いながらも、意識が深淵の奥深くまで沈んで行く。
その時だった。
ピピッ
警戒信号ではなく聞き慣れない音が鳴った。反射的に起き上がったキューカは不審に感じながら、記憶を探る。
味方接近信号、何度かチームを組んで出現した事があるが、今までこんな事は一度たりとも無かった。一体何の為に？
「折角人が良い気分だったのに、迷惑な奴が来たね」
任務を無視してあたしと戦いに来た馬鹿か、それとも他の連中のどちらか・・・何にしても面倒臭い状況になる事は確かだろう。通り過ぎて欲しいと願うばかりだが、そう簡単に事が上手くいかないのは確実だ。

このまま無視しておいた方が無難か。

近付いてくるサイヤ人を記憶の片隅に置き、携帯食料をひと齧りし思案する。実の所キューカは今回の侵略を楽な勤務だと見縊っていた。理由は簡単、通常の任務とは異なり大人数を動員した作戦故に1日程度で終わるのだと予想していたのだ。しかし蓋を開けてみれば一日目は未だ半分程度しか侵略が済んでおらず、彼女が殲滅した都市はそのごく一部だ。この調子でいけば任務が終わるのは数日後の話になるだろう。

「面倒だが、強敵と当たる可能性がまだあるからいいか・・・」

小さく呟きながら視線を向ける。その視線の先には一人の女サイヤ人の姿が、こちらを見ていた。

髪がラディッツの様に長く、背はキューカより頭一つ分低い彼女はスタスタと近付いて来た。その目に敵意は感じられないが、何か怒っている様子にも見えた。

女サイヤ人を見た時、彼女は不思議に思いながらも妙な既視感に襲われた。何処かで見た目、髪、雰囲気・・・その全てが誰かに似ていたのだ。

――――サイヤ人に知り合いは居ないはずなのに、変な気分だ。

そんな風に思いながら、彼女は携帯食料をもう一度齧った。

「やっと追いついた」

「・・・何？」

追いついたと妙な事を言う彼女をよく観察すると、僅かに肩で息をしているようにも見えた。この女サイヤ人の様子を見るに、急いで此処に来たのかも知れない。
「何って、あんたはあたしのパートナーでしょ、一緒に行動するのが当然でしょ?」
「パートナー?」
「え、、あんた話聞いてなかった訳?!」
こいつの言う通り、確かにそんな話を聞いた様な気がする。チームを幾つかに分けてやろうって話だ。
確かチームメイトのサイヤ人の戦闘力は２０００を超えている大人が多かった筈、つまり戦闘力が低いコイツをあたしに押し付けたと言うことになる。
「確かにそんな事言ってたね、あたしの邪魔をしなければ自由にして良いよ」
軽く手を振ったあと、キューカは最後となる携帯食料の入った袋を取り出した。
「そ、そっか。よろしくね!」
彼女が初めに抱いた印象は気が弱そうといったものだった。見るからに温厚な雰囲気はサイヤ人らしからぬものであり、何よりキューカが今まで過ごしてきた中で初めて見るタイプのサイヤ人だった。この時、彼女はこの世界に生まれて初めて他人に興味持つことになる。
「何故そこに突っ立ったままなんだ?そこに座りな」

「え?あ、うん。分かった」
　言われるがままに座る女サイヤ人、それを見た彼女はますますサイヤ人なのかと疑いを持った。女の腰に視線を向けると尻尾が巻かれており、キューカがこれを現実だと認めた。
　それと同時に、女サイヤ人の方向からキューといった可愛らしい音が聞こえた。ふと目を向けると、女サイヤ人は顔を茹でだこの様に顔を赤くさせ、腹を抑えていたのだ。
「携帯食料は持ってきていないのか?」
「うん」
「何故?」
「わ、忘れた」
「動物でも狩ればよかったに何故やらなかった?」
「あんたを追うのに必死で・・・」
　それを聞いた彼女は手に持っていた最後の携帯食料を投げて渡した。投げ渡された女サイヤ人はいきなりの事で驚いたのか、慌ててそれをキャッチする。しかし携帯食料は手にはじかれ宙を舞い、必死に落とすまいと奮闘する女サイヤ人を見ながらキューカは僅かに笑みを漏らした。
　何とか落とさず無事にキャッチする事が出来た女サイヤ人は戸惑いの目を彼女に向

け、携帯食料とキューカを交互に見る。
「それでも食って待ってな」
「うん、ありがと・・・」
女サイヤ人は一言礼をを言い、食べ始める。
携帯食料一つでもサイヤ人である彼女には足りないだろう感じたキューカは近くの森へと出向き、手頃な大きさの魚を獲ってきた。
この行為にキューカは特に悪くないと感じ、魚を焼いて見せた。焼いた魚をがつがつと食べる女サイヤ人に尋ねた。
「あんた、名前は?」
「あたしの名前はギネ、さっきはありがとう」
「キューカだ、さっきはすまなかったな」
ギネという名前にあたしは違和感を感じた。昔どこかで聞いたことがある様な名前、しかしどうやっても思い出せない。あと少しで思い出せるのだが、思い出せない自分に思わず歯噛みする。
ギネはサイヤ人にしては珍しく、好戦的な人間でないと言うことは何となく判る。
「通信で聞いたけどキューカが一番仕事してるんだってね」
「そうか?」

「知らなかったのかい？他のサイヤ人はあんたと違って原住民を一人づつ殺してるんだ、キューカは一気に殺しているんだから仕事が速いのは当然だろう？」
「自分より弱い奴をいたぶって何が楽しいんだか」
　何気なく、空を仰いだ。
　やはり、あたしはこの仕事が嫌いだ。生きる為とはいえ、虐殺した後の虚無感は言葉で表現できない。ただただ虚しいだけで何の魅力も感じられないのだ。既に慣れたとはいえ、好きな仕事ではない。
「あたしも同じだよキューカ・・・」
「なら、早く仕事終わらせないとな」
　キューカの呟きにギネは小さく頷いた。
　それを見た彼女は笑みを浮かべ手を差し出し、ギネはその手を握った。この時、自分に初めて気が許せる相手が出来たと感じたのだった。

第八話

「あいっ変わらずこの星は広いな、リコ星人の都市も馬鹿みたいにある」
一人ごちりながらキューカはちらりとギネを見た。まだ次の地域へ向かう余力はあるように見えるが、明日の事を考えると今日はここで終わらせた方がいいだろう。
ギネと共に仕事をやり始めてから一日が経つが、効率は少し上がったような気がする。あたしが都市の住民を片付けている最中、ギネには周囲の村の制圧を頼んでいる。手間が省けてかなり楽になった。だがそれ以上にリコ星人の数が多い、一つの都市に少なくとも一千万体もいるのだから処理するだけでも流石に骨が折れる。
「ギネ、頼んでいた仕事は終わったのか？」
「うん、数は多かったけどあたし一人で十分だよ」
「ま、そうだろうな」
リコ星人の戦闘力は全体的に見れば低いが、ごく稀に戦闘力数千の個体がいる場合がある。あたしも何度か戦い、ギネにも見つけたら知らせる様言ってある。彼女の戦闘力は８４０、とてもじゃないが戦力としては見れないだろう。現に何度か戦っているところを見たが、動きに無駄があり過ぎるのだ。

元々戦闘向きでは無いのだろう。
「そういえば他のサイヤ人はあたしの事を何て言ってるんだ?」
ふと疑問に思った事をギネに尋ねる。今まで興味どころか考えもしなかった疑問、意味は無いがなんと無く他人から見たあたしの印象に疑問が湧いたのだ。
「仕事が異様に早くて、いつもつまんなそうに過ごしているあんたはある意味有名だ。一部じゃ鉄仮面の女って呼ばれているよ?」
「て、鉄仮面〜?」
ネーミングセンスのかけらの無い渾名に、あたしは少し驚いた。どこに鉄仮面の要素があるのだと聞きたい、仕事中のあたしの表情なのか、それとも話しかけられた時のあたしの反応なのか・・・心当たりがある自分が恨めしい。
「何度かキューカを見かけたけど、まさかこんなにあんたと話すとは思わなかったよ」
満面な笑みで話すギネに、あたしは顔が妙に熱くなった様な気がした。ここまで他人と会話したのは生まれて初めての事であり、久しぶりに戦闘以外の事で楽しいと感じる事ができたのだ。知り合ってから僅かな時間しか経ってないが、気付けばギネに感謝している自分がいた。
「そ、そうか」
「ねえ・・・」

先程の空気と打って変わってギネの声のトーンが低くなり、キューカに疑問を投げ掛けた。何故キューカは平気な顔で人を殺せるのかと、リコ星人の死体を見ながら彼女は言った。
「慣れ、かな・・・」
「え?」
あたしが返した言葉に、ギネは驚いたような顔をしていた。
「初めは自分がやった事に後悔したさ、一時期あたしは罪悪感で押し潰れそうにもなった。だけど・・・」
「だけど?」
「いっその事何も考えないでやった方が良いかなって、一々悩んでちゃ身が持たないからね」
罪悪感は今も湧かなくもない、しかしそれ以上に殺しに慣れてきている。それは決して褒められない事だと思うが、悩み過ぎてあたしの精神が壊れるよりは遥かにマシだ。
あたしの持論を聞いたギネは俯いていてよく表情が読み取れない。
「キューカは強いなあ・・・。あたしもキューカみたいに吹っ切れたいよ」
「そうかい?ギネのそういう性格が良い所だとあたしは思うけどね」
「ううん、いいんだ。よくあたしは甘っちょろいって言われているし・・・」

確かに他のサイヤ人から見たらギネは甘いのかもしれない、だけどそれが彼女の良い所だという事に気付きもしない奴等だ。全員碌でもない奴に違いないだろう。
戦闘力が低く、甘いギネの事を下に見ているんだろうな。
「あたしはギネをそうは思った事は無い。だから今度甘ったるいって言われたらあたしに言いな、そいつの事ぶん殴ってやるからさ！」
あたしが自信満々に言うとギネは少しはにかんで礼を言ってきた。やばい、ギネが可愛い過ぎる件について。
本当にサイヤ人かと疑いたくなる程に可愛い、あたしが男だったら絶対惚れる自信があるね。前世男だったけど・・・。
「話してたらもうこんな時間か、そろそろ飯にでもしよう」
直後、視界にいたギネの姿が突然消えた。あたしが反応すると同時に数百m離れた場所で何かが衝突する音が聞こえ、スカウターから警戒信号が鳴り響く。リコ星人が奇襲を仕掛けてきた事に気付いたのはそれから二秒後の事であった。
「敵!?ギネh・・・グアッ！」
ギネの安否を確認する暇もなく、キューカは突然現れたリコ星人に頭を掴まれコンクリートの地面に叩きつけられる。その後顔がめり込んだ状態のまま、コンクリートを抉る形で数m抉った後に彼女は凄まじい勢いで飛ばされた。

一瞬、何が起きたのか分からなかった。襲撃だと気づいた次の瞬間、あたしは反応する間もなく倒されていたのだ。今まで戦ってきたリコ星人の奴らとは違う、事前に聞いていた戦闘力が高い個体と遭遇したと理解するのにさほど時間がかからなかった。

「い、いつの間に・・・」

スカウターに反応は無かった、なのに何故襲撃を受けた?それにコイツ、さっきの一瞬であたしが反応する前に攻撃を当ててきた。偶然なのか、それとも相手が強いのかは分からない、しばらく様子を見るか・・・。

埃を払いながらゆっくりと立ち上がり、彼女は奇襲を仕掛けたリコ星人を見据える。そしてキューカは殴り飛ばされたギネをちらりと見た。

「ギネは、生きてはいるがさっきので気絶したか・・・」

元々戦力として見てはいなかったがそれとこれとは違う、死んではないようだがやはり心配だ。だが、まずコイツを何とかしないとな・・・。

チッ、さっきから仕掛けてこないあいつはなんだ、挑発でもしているつもりか?なら、ムカつく野郎だ。

「戦闘力・・・たったの2だと?戦闘力をコントロールするタイプか、厄介な・・・」

これじゃあ迂闊に動けやしない。相手の実力が未知数な以上、下手に動くと逆に自分の首を絞める羽目になる・・・どうしたものか。

頬に嫌な汗が垂れる。ゆっくり歩きながら近づくそいつに、あたしはただ見ることしか出来なかった。やがて距離が５０ｍを切った時、目に見えない速度で消えたのだ。
「き、消え・・・アガッ、ギ、ギ・・・」
消えたと思った瞬間、そいつの拳はあたしの腹部に深く食い込んでいた。血反吐を撒き散らし、奴が視界に入った瞬間あたしは漸く攻撃された事に理解しする。見えなかった、奴の動きが・・・。奴は予備動作無しであたしの動体視力を凌駕したのだ。
こいつは、ヤバいと理解するのにさほど時間は掛からなかった。
直後、あたしは投げ飛ばされ、レンガ作りの壁に激突する。咄嗟にさっきまでいた場所へ視線を向けるも、奴の姿は当然のようになかった。
「・・・っ!?」
一瞬何か見えた様に感じ、防御姿勢を作る。次の瞬間、再びあたしに衝撃が加わった。だが、幸いな事に咄嗟の判断でやった防御姿勢が功を奏し、食らったダメージはさっきより小さい。
再度投げ飛ばされる自分、その後再び奴の影が見えた。
「少しずつだが、あんたの動きが見えてきた」
相手に聞こえない声で呟く。
今まで一方的にやられていたあたしだが、小さな勝機を見出していた。現在奴の戦闘

力は５８００、恐らくこの数値が奴の本気なのだろう。
今度はあたしが攻めに入る番だった。気合いで奴を吹っ飛ばし、そこへ数発の気弾で追撃する。無論これだけであたしの手は緩めない、全力で奴の腹を殴り続けた。
「そーれっ!!」
ハンマー投げの要領で奴を空高く飛ばし、高速移動で先回りする。両手を組んだ状態で奴を殴打した。
凄まじい勢いで落下して行き、あと少しで地面と衝突しそうな所で驚くべき事にあいつは静止したのだ。
「まさかだとは思いたく無いけど、あたしの攻撃をまともに食らっておきながら大したダメージを受けていないとはね・・・」
それに加えてあたしの方は、さっきのダメージがまだ残っている。まるで身体中が悲鳴のようにガタガタ言ってるし、流石に不味いな。全力のフルバーストを喰らわせてやりたいけど、あの調子じゃあ余り効きそうないだろうし参ったなこれは・・・。
今まで戦った敵と比べて奴は一番強い、それこそ比べ物にならないくらいに奴は強い。戦闘力のコントロールが出来る時点で気付いていたが、奴は技術面でもあたしより強いだろう。
「勝てるか分からないけど、やるか!!」

直後、二人はその場から消え失せた。
沈みかけた太陽を背に、激しい戦闘が始まった。超スピードで移動し合い、互いに繰り出した攻撃が相殺される形で衝撃波が各所で発生する。
「動きが、速すぎる・・・!!」
苦渋の表情で奴の攻撃を回避し、カウンターとして胴体を殴る。しかしそれでも大した有効打にはならないだろう。奴は嫌らしいことにあたしの攻撃を受ける直前、姿勢を僅かに変えて受けるダメージを最小限にしていやがる。
「・・・ッ!?」
仕返しとばかりに顔面を殴られ、その衝撃でまたしても吹っ飛ばされる。彼女は地面と激突する直前に数発の気弾を放ち、追撃するリコ星人に当てた。気弾の爆発で生じた煙がそいつの身体全体を覆い、一時的に見えなくなった。
「クソッ!」
直感的にキューカはその場からバックステップでその場から離れ、直後にリコ星人の拳が地面に深々と突き刺さっていた。
一瞬でも遅れたらあの一撃であたしは死んでいたな。咄嗟とはいえ、奴を視界から逃せば流石にマズい・・・。どうやれば奴にまともなダメージを与えれられる?
思考を巡らせるも、戦況を一変させるような策はあまり思いつかなかった。しかし全

く無いわけではなかった。
　至近距離で全力のフルバーストを当てれば・・・いや、それだと隙がでかすぎる。だが、これしか方法がない・・・。
「どうすれば・・・」
　戦闘の主導権を一瞬でもあたしが握ればその隙をカバーできる。だけど奴はあたしの動きを全部見切っている節がある、ここは賭けるしかないか。
　この戦いが始まって以降、初めて彼女から攻撃を仕掛けた。地面を強く蹴り、己が出せるスピードを最大限に発揮し肉薄する。
　右の拳を振り上げ、リコ星人の顔面を殴る動作を見せた時、そいつが僅かに反応する様子が見えた。
　――――掛かった。
　実際に攻撃をやったのは右の拳ではなく、膝蹴りで奴の腹部に深く食い込ませることに成功した。ようやく、キューカはこのリコ星人にまともなダメージを与えるのに成功したのだ。
　しかし、ここで気を緩めるわけにはいかない。彼女は間髪入れず、掌にエネルギーの塊を作る。
「今までの、お返しだよ!!」

直後、極太のエネルギー波がリコ星人を包み込んだ。できる限りの力を籠め、放ったフルバーストを異常なタフさを誇るあのリコ星人でもまとも受ければ無事では済まないだろう。数秒後、地面に着弾したエネルギー波は強烈な閃光とともに空高く土煙が舞い上がる光景が見えた。

スカウターは先の戦闘で壊れて使い物にならなくなっているが、キューカはまだあのリコ星人が生きていることを確信した。

「嘘・・・」

言葉が出なかった。真正面からあたしの攻撃を当てた、当てた筈なのに奴は堪えている様子がない。少なくともかなりの威力だったはずだ、流石にこれはショックだな・・・。

だけど、諦めるわけにはいかない。

もはや打つ手無しと判断した彼女は、肉弾戦による決着を挑むことにした。既にキューカは戦う気力は無きに等しく、意地だけで戦っていた。負けたくないという彼女のプライドが唯一の原動力となったのだ。

「ハァ、ハァ・・・」

戦闘が一時的に終わる頃、彼女の姿はボロボロだった。至る所から出血し、傷がない場所を探す事が難しい程に彼女は傷ついていた。

もはや、彼女には勝ち目が無い。戦闘力に負け、パワーに負け、スピードに負け、技

術に負け・・・、全てに於いてあのリコ星人に勝る点は無かった。このまま戦闘が続けば自分は確実に殺されるだろう、だがそれでもキューカはこの戦いを楽しんでいたのだ。現に、今も笑みを浮かべている。絶望的な状況下でも彼女はまだ勝利を諦めていない目をしていた。

「あたしも、まだまだだな・・・」

勝ち筋は見えない。奴の弱点も見つける事が出来ず、あたしの攻撃は一切効いている様子は無い。・・・負けたくはないけど、負けるかもな。

「ハハッ・・・グホッ!?」

奴は仕上げと言わんばかりに強烈なボディーブローを打ち込んできた。血反吐を撒き散らすあたしに、既に抵抗する余力すらも残っていない。頭を掴まれ、伸びたあたしに重い一撃を当て続けた。

「止めだ」

ここに来てようやく喋った奴は、ただ一言言うとあたしの首を絞める。なんとなく、分かっていた。いつか、自分がこうなる事を・・・。

あたしは主人公では無くただの一般人、いわばモブだ。だから、覚悟していた。あたしはコイツに、殺される。

命乞いをするつもりは無い、今まで散々殺してきたのだから当然の事だ。

――――あぁ、死ぬのか・・・。

短い間だったけど、碌な人生では無かった。好きでも無い仕事をやらされ、仕方なく殺してきた。だからあたしに相応しい結末なのだろう。

意識が遠くなる。死が近づいてきたようだ、もし自分の願いが叶うとしたら、もっとギネと喋りたかったなぁ・・・。

今日の満月は、凄く綺麗だ

第九話

首を握る力が、徐々に強くなるのを感じた。奴は、ここであたしに止めを刺すつもりだろう。

意識が朦朧とし、死が近付いてくるのが分かる。いつか死ぬだろうと思っていたが、今その時が来ている。奴からしたら身勝手極まりないだろうが、どれだけ覚悟していようともあたしだって死にたくはない。

「止めだ」

漸く奴が口を開いた時、あたしの命は尽きようとしていた。意識が徐々に薄れ、ただ死を待つだけしかあたしにできる事は無い。

抵抗しようにも力が残っておらず、目を微かに開く力だけで精一杯だった。

「あっ・・・がっ・・・」

我ながら、身勝手な望みだというのは理解している。できる事ならもう一度、ギネと喋りたかった。

短い期間だが、戦闘以外初めて楽しいと思える時間を過ごしたのだ。まだ、死にたくはない。

その時だった。微かに開くキューカの目に、柔らかい光が差し込んだのだ。
太陽光では無い光、人工的に発せられた光では無く自然由来の光・・・。丸い月が彼女の視界に入ったのだ。
「・・・ッ!!!」
刹那、キューカの身体全体が脈打った。まるで身体そのものが心臓になったかの様に脈打ち始め、それを見たリコ星人は思わず首を絞める力を緩めさせ、やがてその手を首から離した。
この時、キューカは薄れ行く意識の中で混乱していた。既に底をついていた力が、急激に湧き出てきたのだ。それと同時に強烈な破壊衝動も湧き出し、彼女を混乱させるのに十分だった。
――――あぁ、大猿になるのか。
彼女はここでやっとサイヤ人の特性を思い出した。満月の光を見た時、その光に含まれる１７００万ゼノを超えるブルーツ波が己の目を通して尻尾に反応し、サイヤ人を変身させる能力がある事をキューカは思い出した。サイヤ人が大猿に変身した際の戦闘力は、通常の１０倍も膨れ上がるのだ。
――――まず、いな・・・。
このまま変身してしまえば、己の理性を失ってしまう。もしそうなれば、あのリコ星

人を無視して周囲を手当たり次第に破壊するだろう。今いる場所からそう遠くない場所に、ギネが気絶しているのだ。彼女を巻き込んでしまえば、重症どころの話ではなくなる。

キューカは最後の気力を振り絞り、大猿のコントロールに力を入れた。だがその努力は虚しくも、叶う事ができず彼女の理性は破壊衝動に呑まれていった。

そこからは、キューカの意識は朧げだった。まるで己の身体が別人格に乗っ取られたかの様に身体が動き出し、暴れ始める。

勿論理性を取り戻そうとしたが、結果は変わらなかった。意識は完全に失わず、朧げな状態で大猿に変身した自分が暴れている映像を見せられている様な感覚だった。

ただ見せつけられている状況の中、彼女は己の未熟さを恨んだ。今まで自分を散々痛め付けた相手に目も向けず、ただ暴れているだけの大猿を制御できない己を恨んだ。

しかし、ただ暴れるだけでは無かった。その標的をすぐ近くに浮かんでいたリコ星人へと変わり、右の拳で奴を殴り飛ばしたのだ。殴り飛ばされたリコ星人は、幾つもの高層ビルを貫通しながら超スピードで飛ばされた。

地面を強く蹴り、追撃する。進路上の構造物を薙ぎ倒しながら高スピードで進む大猿の姿は正しく圧巻の光景だろう。

「ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝!!!!」

咆哮を上げ、奴を地面へ殴りつける。
地面に叩きつけられたリコ星人に対し、大猿は巨大な拳を振り落とす。そこからは大猿の一方的な攻撃が続いた。
ほぼ瀕死の状態になったリコ星人に対し、大猿は凄まじいスピードで殴り続けたのだ。大猿の両腕はブレ、上手く見る事は出来ない。
まるで念入りに、確実に奴の息の根を止めるかの如く過剰な攻撃を大猿は続ける。その姿はまるで、キューカの意志を反映している様にも見えた。
大猿が攻撃の手を止めた頃、かつてリコ星人だったものがそこにあった。既に身体の原型を留めておらず、ぺしゃんこになるまで打撃を加えた続けた事になる。
大猿の勝利の咆哮が、遥か遠くまで鳴り響いた。
??
身体に乗り掛かった瓦礫を押し除け、ギネはその小さな身体を起き上がらせた。
後頭部に痛みが走る。この時、ギネは漸く自分が今まで気を失っていた事に気がついた。日の光がある事から一晩中気を失っていたのだろう、と推測を立てながら辺りを見渡す。
一面の廃墟と化した都市と戦闘が発生した痕跡、ここでギネは気を失った原因が敵の襲撃による物と理解した。

「キューカ応答して!!キューカッ!!」
スカウターに先日知り合ったばかりの少女の名を叫ぶ。しかし、返事は来なかった。再びキューカとの通信を試みるも、結果は変わらず返事は来ない。
「まさか・・・」
あり得ない・・・と思いつつも、ギネは最悪の事態を思い浮かべる。キューカの戦闘力は同年代の下級戦士の中で突出しており、技術もかなりあるという事も聞いている。故に彼女が負けた事が信じられなかった。
「戦闘でスカウターが壊れたのかも」
何故そんな簡単な事に気がつかなかったのだろう、と思いながらスカウターでキューカの戦闘力を探す。
しかし、反応は無い。彼女にセットしてあった反応も途切れていたのだ。何かの間違いだと思い、何度か同じ事をするも結果は変わらなかった。
「嘘・・・」
彼女が死んだとは考え難い、しかしそれでもキューカが負けたかもしれないのだ。あのキューカが、戦いでは既にベテランの域に達している彼女が負ける姿は想像できない。だから、まだ生きているだろう。ギネはあるのかも判らない希望に縋りながら、キューカの捜索に入った。

数々の戦闘の痕跡がその戦いを物語る。どんな敵なのか分からないが、何よりキューカの安全が一番大事だった。

「お願い、無事でいてキューカ・・・」

ギネにとって、キューカは初めて出来た友人だった。彼女はサイヤ人の中で珍しく穏やかな性格を持ち、戦闘力は低い。それ故によく他のサイヤ人からは下に見られることが多々あった。そこへ更にギネが殺しを嫌う事で拍車がかかる。

時には堂々と皮肉を言われ、役立たずと言われる事もあった。しかし、キューカは違った。

初めてキューカを見たとき、彼女はとても冷たい目をしていたのが印象に残った。まるで何もかも興味がないその目と仕草は、サイヤ人の中でも異質そのものだった。

だが、実際に話してみればギネが抱いていたイメージとは逆に性格は明るく、そして話しやすかった事に驚いた。なによりも驚いたのが、キューカはサイヤ人特有の好戦的な性格であるにも関わらず、格下を無暗に痛めつける行為を好いていないことだった。

強さだけを求め、必要以上の殺傷を好まないキューカこそがサイヤ人の本当の在り方なのかもしれない。それが、キューカに対するギネの評価であった。

キューカの捜索に乗り出してから約数十分、戦闘の痕跡を辿って彼女を探している内にギネはあることに気が付いた。ある地点から、戦闘の痕跡の規模がやけに大きくなっているのだ。

しかし、それは戦闘の痕跡というより暴れた痕跡と表現をした方が正しいのかも知れない。それほどまでに、建物の瓦礫の量が増えていたのだ。

ギネは疑問に思いながらも、その痕跡を辿って行った。痕跡は都市の郊外まで続いており、まるで誘導していたと思える程の綺麗な痕跡の直線があった。

「・・・ッ、キューカ!!」

ここに来て、ようやくスカウターでキューカの反応をとらえる事に成功した。しかしキューカの戦闘力値は余りにも低い、スカウターに表示されている数値は１０にも満たない。

ギネは倒れているキューカを見つけると、急いで駆け寄って彼女の容態を確認する。

「酷い怪我だ・・・」

キューカの怪我はあまりにも酷かった。傷が彼女の至る所にあり、傷がない所を探す方が難しい。その上、外傷だけではなく体内の方も酷く傷付いているのがすぐに分かる。

すぐさま彼女をメディカルマシンへ入れなければ命に関わるほどだった。

「アタックボールの制御コントローラは――――」

手慣れた仕草で戦闘ジャケットのポケットを弄る。ギネは戦闘は苦手だが、救命活動はそれなりに得意な方だと自負しており、他のサイヤ人が致命傷を負った際、積極的に取り組んでいたのだ。

「――――あった!!」

キューカのダメージを考えれば、制御コントローラも壊れていても可笑しくはなかった。しかし奇跡的にコントローラは壊れておらず、ギネは早速アタックボールを呼び出すコマンドを送信する。

これで一先ずは大丈夫だろう。心配ではあるがサイヤ人の生命力は宇宙でもトップクラス、戦闘力が一桁有ればまだ余裕はある筈だ。

「ふう、それにしてもキューカが戦った敵ってどんな奴だったんだろう?」

幾ら戦闘が苦手なギネでも彼女もサイヤ人、少なからずどんな敵だったのか程度には興味が湧いた。実際に戦うかは別として、他のサイヤ人達からは鉄仮面と揶揄された者がこんな状態になるまで追い詰められたのだ。これで気にならなくては可笑しいだろう。

「・・・ん?」

気絶しているキューカを見ていた時、彼女はある違和感に気が付いた。

「キューカの戦闘ジャケットのサイズが合ってない？」

サイズが合っていないのだ。本来、戦闘員に支給される戦闘ジャケットは本人に合ったサイズが支給され、あそこまでブカブカになるサイズは支給されない決まりだ。

いきなりサイズが変わる事なんてあり得ないが、巨大化して元に戻ったりしな、い、と・・・。

「キューカ、大猿になったのかぁ・・・」

ギネはここでやっと納得がついた。ここに来るまであった破壊痕、それが大猿が原因だったのなら納得がいく。

ギネ自身は大猿に変身した事は無いが、大猿になった時の戦闘力は１０倍以上になると聞いている。それで彼女は敵を倒す事が出来たのでだろう。

だが、キューカと初めて会った日の夜、彼女は強い敵と戦うのが好きだと聞いていたので彼女はあまり勝った気になれないのかもしれない。そう考えながら、ギネは空を仰いだ。

第十話

今まであたしは、何をしていたんだ？確か、滅茶苦茶強いリコ星人と戦ってて・・・あぁ、そうか。

あたしは、死んだのか。死因はあの時に首を掴まれて、窒息死といったところだろうか。だけど、首を掴まれていた時、何か見たような気がしたが・・・思い出せない。

なんだか、気持ちがいい。なんというか丁度いい湯船に、全身をつからせている様な感覚だ・・・。

「・・・・・・・・――――――・・・――――？」

「――――・・・・・・・・――――・・・・」

話し声が聞こえる。

内容は聞き取れないけど、近くに誰かが居る様だ。地獄の鬼だろうか？

「――――・・・やられたみたいだな。意識レベルも順調に回復している」

ハッキリとしない意識の中、あたしはゆっくりと目を開いた。薄緑色の液体、そしてガラス窓の向こう側から差し込む光を見て、ここがあの世では無いと理解するのにさほど時間は掛からなかった。

死んで、いないのかあたしは・・・。

何故自分が未だに生きているのか疑問に思うが、それ以上にギネの安否が心配だった。あの時キューカはできるだけギネから離れて戦う事を心がけていたが、リコ星人の相手でそれどころではなかった。

彼女は思い出す、あのリコ星人との戦いを鮮明に思い浮かべ奥歯を噛み鳴らす。悔しかった、己の全てをぶつけても尚、奴には到底届かなかった事に・・・。

それと同時に、キューカは嬉しかった。いくら強くなろうとも、上には上が居るという事実を初めて実感することが出来た事に、彼女は喜んでいたのだ。

もう一度、あいつと戦いたい。

そんな事を考えながら、キューカは思考を巡らせる。奴ならどんな動きをするのか、奴ならどんな技を使うかなど脳内シミュレートしながら口元に笑みを浮かべた。

「うん、これで全ての傷は治ったな。よし、マシンのシステムを落とせ」

彼女の思考を遮る形で外から声が聞えた。

それと同時に興奮していたキューカの感情は、一気に冷めていった。折角人が気分を良くしていたのにと思いながら、小さな溜め息を吐く。

治療の完了を知らせるブザー鳴り、メディカルマシーン内の液体が排出される。

「機嫌は如何かな?キューカ殿」

軽いストレッチをやりながら、話しかけてた異星人を見る。大して特筆すべき事がない、ただの医者だ。出来るだけ関わりを持ちたいとは思わないが、ここは何処かくらいは聞いておかないと。
「此処は何処だ？」
「惑星ベジータのＢＨ―６地区であります」
「そうか」
惑星ベジータとリコ星はアタックボールで片道二週間、最低でも二週間は気を失っていた事になるのか。身体が鈍っていなければ良いが、その時は鍛え直すしかないか。
「それにしても、あのキューカ殿が大猿に変身しなければならない程の敵が居たとは信じられませんな」
「大猿・・・？」
相手に聞き取れない程の小さな声で呟く。あたしは大猿に変身した覚えがない、気を失う直前はあのリコ星人に止めを刺される直前だった筈・・・あの時、何かの光を見たような覚えが・・・。
ここでキューカは漸く思い出した。自分が大猿へと変身し、制御し切れない己の体を制御すべく奮闘していた事を思い出した。
そして、大猿によって変身したキューカによってあのリコ星人が死んだ事も、思い出

したのだ。
「キューカ殿？」
「着替えは何処だ」
「あそこに置いてありますが」
「そうか。もう十分だ、この部屋から出ていってくれ」
「ハァ、では失礼しました」
　戸惑いの色を見せながらもすぐさま退出した異星人を見た後、キューカは大きな溜め息を吐いた。今までに無い深い深い溜め息、その顔は落胆のそれ以外にはない。
「これは、戦いに勝ったとは言えんなぁ・・・」
　何となくではあるが、自爆を試みたセルが理解できた気がする。それほどまでに悔しかった。
　運も実力の内だと言うが、満月の光が目に入らなかったらあたしは確実に死んでいた。偶然が重なり、偶々大猿に変身しただけだ。それも、碌な制御もできないまま奴を殺した・・・。
　決してこれは勝ったとは言えない。あたしは奇跡的に生きながらえただけに過ぎない。
「大猿の制御、もしかしたら出来るかも・・・」

記憶をたどれば微かながらも意識を保ち、かつ多少の制御ができていたと思う。孫悟空の様に、記憶が失われるような事は起きて欲しくはない。

「そういえば、あたしの戦闘力ってどれくらいなんだ？」

サイヤ人は瀕死の状態から復活すると、戦闘力が急激に上昇することがある。その上昇率は不明なれど、リコ星での戦いで瀕死の重傷を負ったあたしの戦闘力もかなり上がっているだろう。

現にあたしは上手くパワーのコントロールが出来ていないのだ。マシンから出てくる際に掴んだ所を見ると、ひびが入っているのが見えた。

「戦闘力５２００、かなり増えてんじゃんあたし・・・」

精々、大きくて１０００前後だと思っていたが、これは嬉しい誤算だ。あのリコ星人には一歩及ばない戦闘力だが、それでも十分な値なのは間違いないだろう。

「ハハッ」

乾いた笑いが口から漏れる。

まだ、あたしにも成長の余地があることを改めて再確認することが出来たのだ。戦闘力や技術の向上だけではない、あたしには改善すべきことがまだまだある。

楽しみで楽しみで仕方がなかった。自分が何処まで成長するのか、この世界に何処まで通用するのか楽しみだ。

「クシュン・・・その前に、着替えないとな」
思い出したがあたしは裸のままで突っ立っている状態だ。いくらサイヤ人の身体は強靭でも、風邪は引くときは引くものだ。
・・・寒い、いくら何でも考え事に時間を掛けすぎたか。

「キューカッ!!」
着替えていた時、扉が開くと同時にあたしの名を呼ぶ声が聞えた。
何事かと思い、視線を向けてみればギネが必死の表情で立っていた。
「・・・・・・」
いきなりの事だったので、キューカは固まった状態でギネを見ていた。ギネがやって来たタイミングはキューカが下を履いている最中の出来事である為、二人の間に微妙な雰囲気が漂う。
「ギネ」
「な、なに?」
「早く閉めてくんない?」
「ごめん・・・」
お前はどこのラノベ主人公だと内心突っ込みながら、キューカは思う。前世の記憶を

覚えていないのに対し、何故こうも無駄な知識が残っているのだと疑問に感じた。
本来ならばここは互いの無事を喜び合う場面だが、タイミングが悪かったが故に気まずい空気が流れる。
「その、怪我は大丈夫だったか？」
「うん・・・、あたしはかすり傷だけだったから大丈夫」
「そうか」
「・・・・・・」
再び沈黙が訪れる。
先ほどとは違って空気は重く、ギネは心底申し訳なさそうな顔をしながらキューカを見つめる。キューカはギネが何か言いたそうにしている事に気が付く。しかし、ギネは言い出さなかった。まるで言いたくても言えない、そんな感じがした。
「えっと・・・」
「どうした？」
「あの時は、ごめん」
目尻に涙を溜めながらギネは話す。
あの時、自分は何もできずただ気絶だけしていた事。キューカが戦っているとき、自分は何もやらなかった事。まるで全て吐き出すかのように、ギネは喋った。

「なんだ、その事か」
「？」
やれやれと言った表情で言うキューカに、ギネは顔を傾げる。
「別に気にしてはいないよあたしは」
「だけど・・・」
「だけどじゃないさ、言い方は酷くなるけど戦いにおいて最初から期待していなかったよ」
キューカの言う通り、ギネの戦闘力は１０００にも満たない。最初からキューカは彼女が加わってから、精々仕事の効率が良くなった程度としか考えていなかった。
「もしあんたも一緒に戦っていたら、確実に死んでいたよ。戦ったリコ星人はあたしよりも強かったし」
「うん・・・」
「ギネ、結果論になるけどあんたが気絶していた事が一番良い状況だ。もし何かが間違っていたら、今頃あたしかギネのどちらかがこの場に居なかったと思う。だから、そう気を病むな」
慰めるようにギネの肩に手を置く。彼女の身長はあたしより低い、それ故に俯くギネの表情を確認する事はできないが、どんな顔をしているのかなんと無く分かる。

ギネは、泣いていた。ぽたぽたと涙が床へ溢れ落ち、涙の跡が床に残る。
「ああ、泣くな。他のサイヤ人に見られたら笑い者だ」
顔を拭えそうなタオルを見繕い、それを渡す。
ギネはあたしが見てきたサイヤ人の中で、変な奴だと思う。会ったばかりのあたしを心配し、尚且つ容易く涙を流すサイヤ人は見た事もない。だが、悪い気はしなかった。

第十一話

D月AG日

何年か前と同じく暫く仕事が無いので、大猿の制御を目的とした訓練をやろうと思う。そしてこれは訓練に関する進歩や、気になった点をまとめるために今日から書き残す事にした。

まあ、初日なのであたしが訓練に使う惑星をメモしておこう。

あたしが今いる惑星に名前は無いが、少々特殊で有名だ。普通、月には満ち欠けが存在するが、どういう訳かこの惑星にの月には満ち欠けという概念が存在しない。つまり、毎日が満月の夜を迎えるという訳だ。大猿の制御を練習する場として見ればとっておきの惑星だろう。

さて、今日はこれくらいにしておいて続きは明日に書こうと思う。

D月AH日

夜が開け、太陽が眩しい。周囲を見渡せば予想通り、辺り一面荒野が広がっていた。予想していた通り、あたしは大猿の制御が出来なかった。制御ができていたら始めからこの星に来たりはしないだろう。

まあ、前回と同じく記憶があるのでまだ希望があると思いたい。それにしても・・・、次の夜まで暇だ。

Ｄ月ＡＩ日

昨日の昼間の間は兎に角暇だった。暇で暇で死にそうだった上、身体を鍛えようにも大猿に変身した後の体力消耗を考えれば、昼間の間ずっと体を休めていなければならないのだ。

あまりにもやる事がなかったので、間抜けな声を出していたのが記憶に新しい。あぁ、大猿の制御が出来るまでずっとこれが続くのか・・・。

大猿の訓練？前回と何も変わってないが？気になる点を挙げるとすれば意識の問題だとは思うが、変化が現れるまで耐えるしかないか。

Ｄ月ＢＺ日

成功した!!まだ制御と言える出来ではないが、それでも念じるだけで向きを変えられるようになった。これは小さな一歩ではあるが、あたしにとって大きな一歩でもある!!はて、この言葉をどこかで聞いたような気がするが・・・まあ良いか。今日の飯は巨大蜘蛛の丸焼きではなく、牛擬きの丸焼きにしよう!!

Ｄ月ＢＡ日

糞ったれ、はしゃぎ過ぎてそのまま夜に寝てしまった。お陰様で一日を無駄にしてし

まったよ。あたしは遊びに来ているわけでもないのに、一体何をしているのだか・・・。
罰として百キロ先にあった大木までうさぎ飛びでもやろうかな。
D月BB日
さて、今回は一昨日と同じ結果で終わってしまった。出来た事も向きを変えるだけで何も変わってはいない。結局、昨日はただ無駄な時間を喰った事になる。本当に勿体ない。
D月BC日
今日はどういう吹き回しなのか、ギネがやって来た。聞けば心配で見に来たらしい。ギネの顔を見るだけで癒されてしまう。
いつ見てもギネは可愛い、そして抱き着いてそのまま匂いを嗅ぎたい。絶対良い匂いだろうし、一生ギネの匂いを嗅ぎたい。・・・文面にすると酷いな、これ。
兎に角ギネは可愛い、以上!!!
D月BD日
あいつが作る料理が物凄く美味かったのを、ここに書き残しておこう。あまりの美味さに思わず、毎日味噌汁作ってくれって言っちまったよ・・・。
当然のようにこのセリフの意味を知らないギネは首を傾げていたのだが、その姿もまた可愛い。君本当にサイヤ人？

・・・大猿？昨日と同じく変化は無かったよ。

Ｄ月ＢＥ日

最初はメモとして書いていたつもりだが、どう言う訳か日記として書いている事に気が付いた。まあ、あたし的にはもうどうでも良い事だが。

訓練は今のところ成果らしい成果はでてない、むしろここ数日の間は何も変わっていないようにさえ思てくる。もしかするとあたしには大猿の制御が出来ないのかも知れないと考えたが、兎に角まだ諦めるには早すぎると思う。

まあ、今日の結果次第だろうな。

Ｄ月ＤＺ日

ここ暫くの間、特に書き残すことが無かったので日が開いてしまった。最近この行為に意味があるのかと考える時があるが、暇潰し程度になるから良いだろう。

大猿の訓練は概ね順調、毎晩変身している甲斐あって徐々にだが大猿の制御が出来るようになった。個人的にはさっさとこの訓練を終わらして、鍛えたいと思い始めてきている。あと少しの辛抱といったところだろうか？

改めてこの惑星を見れば、あたいが来た時よりもかなり荒れてきている。まあ、あたしには関係が無いことだろうが。

Ｄ月ＤＡ日

最近、前世の記憶を思い出そうとしているあたしがいる。特に未練がないとおもうが、やはり気になりはする。前世のあたしが何をやって、どんな人生を歩んでいるのかをしりたい。

ここ数年の間、あたしの性格はほとんどサイヤ人と変わらなくなってきている。しかし今の仕事が好きになれないのは変わらないものの、今の状況から逃げ出そうとは考えもしなくなった。

この変化があたしに何の影響を与えるのか分からないが、今後の事は考えなくても良いだろう。変に考えない方があたしらしい気もする。

E月A日

大猿の制御はあと少しの所まで来た。この調子でいけば一週間以内に終わらせることができるだろう。

長かった、この惑星に来てから一か月も経ってないが、それでも短いとは言えない時間をこの星で過ごしている。

それと最近気が付いたことだが、どうも満月を見てから変身するまでの時間が長くなっているような気がする。これはもしかすると自分の意志で変身するか否かを決められるようになったのかもしれない。

今夜あたりにでも少し試してみるとしよう。

E月B

結果から先に行っておこう。昨日単なる思い付きで始めた実験だが、実験は成功した。

どういう理屈なのかはわからないが、満月を見ても自分の意志で変身するか決められるようになった。これはあたしにとってかなり嬉しい誤算だ。今後あの時のような奇跡は起こらなくなるが、それでも自分の意志で変身をコントロールできるのはかなり大きい。

これで心置きなく満月を見ることができるようになるだろう。

E月C日

ここ最近、暇潰しとして飯時には何か工夫して作るようにしている。所謂、料理の練習といったところだろうか。

ギネが作る料理を食べて以降、どうも物足りなく感じてしまう。あの味に近づけようと練習をやってみたものの、一向にあの味に敵いそうもない。ギネの奴、サイヤ人のくせして女子力が高くないか？

E月D日

今日は何も書きたくはない。

E月E日

まだ気分が良くない。多分だが、昨日のあれのショックでまだ立ち直れていないのだろう。

書くのはまた明日にして今日は寝よう・・・・・・・。

E月F日

さて、だいぶ心が落ち着いてきたので状況を整理しておこう。

一昨日の夕方、軽く運動をしていた時にふと尻尾の事を思い出した。腰を見ればサイヤ人の象徴とも言える尻尾が腰に巻いており、そういえば鍛えていないなと思いながら自分の尻尾を強く握ったんだ。

それが全ての始まりだ。尻尾を強く握った瞬間、背中にゾクゾクとした電流が流れるような感覚を感じ、あたしのものとは思えぬ声が出た。

暫くの間何が起きたのか分からず、あたしはずっと倒れていた。今まで味わったことがない屈辱と敗北感、あたしのプライドが粉々になった瞬間だった。

自分の尻尾がこうも弱かったことに、なぜ今まで気が付かなかったのだろうか?ずっと腰に尻尾を巻いていたのが原因だと思うが、気付く機会がなかったわけではない。

はやくこの弱点を克服しなければ。夜は大猿の制御、昼間は尻尾を鍛えよう。

それともう、今後この日記に何か書こうとは思わない。はぁ、気分が滅入るな・・・。

第十二話

ギネは困惑していた。

死んだ目で出された料理を食べるキューカの姿は悲しみを感じさせるものがあった。あの惑星で何があったのかは分からない、大猿を制御すると言って飛び出していった彼女がまさかああにも落ち込んで帰ってくるとは誰が予想できるだろうか。

「えっと・・・」

どう声をかけていいのか分からないまま、ギネは言葉を詰まらせる。キューカが出て行ってから数日後、ギネは様子を見に行ったが彼女はなんともなく元気そうだった。

あの日以降、何かあったのは確実だろう。だからと言って聞き出せる雰囲気ではない、今のキューカの機嫌はかなり悪かった。

「悪いねギネ、態々誘ってくれたのに・・・」

気分はあまり良くない。尻尾の弱点を知ったその日からというものの、彼女はひたすら尻尾を鍛え続けていた。木の枝から尻尾だけで宙づりになり、大型動物に尻尾を踏ませたりと工夫していた。

しかしそれでも根本的な解決にはならない。最終的に彼女は持ってきていた栽培マ

ンを使い、尻尾を握るよう命令したのだ。その時の光景は余りにもシュールであり、キューカにとって屈辱にまみれていた。

大猿の制御ができるようになったものの、尻尾は相変わらず弱いままだった。今のキューカにとってそれはとても耐えられない事なのだ。

「あたしは別に気にしてないよ、でも大丈夫？」

「大丈夫じゃない・・・」

そう言いながら彼女は肉を口に入れた。

当初の目的は何とかなったものの、新たに見つかった弱点を克服しようと四苦八苦したのに解決に至らず落ち込むのも仕方のない事かもしれないのだ。

「キューカ、あの惑星で何かあった？ずっと機嫌が悪いけど」

すると彼女の手が止まり、何か思い出したかのように両手で顔を隠した。隙間から薄っすらと頬が朱に染まっているのが見え、それを見たギネは首を傾げさせた。

「キューカ？」

「――――っぽ」

「え？」

「あたし、尻尾が弱い事に気付いたんだよ・・・」

「え、尻尾ってあの尻尾だよね？それだったらサイヤ人全員も同じだと思うけど・・・」

ギネの言う通り、尻尾はサイヤ人にとって最大といえる弱点だ。しかし、その弱点も鍛えれば克服できるようなものであり、そこまでキューカが気にするほどでも無いように思えた。

「それは知ってるよ、それに鍛えればなんとかなるのも知っている。だけど・・・」

「だけど?」

ここでキューカは覚悟を決めるかのように深呼吸をした。

「幾ら鍛えても弱いままだったんだよ・・・」

溜め息を吐きながら彼女は頭を抱えた。

それを見たギネは、なんとか落ち込むキューカを慰めようと頭をめぐらせる。ギネもキューカと同様に尻尾が弱点なのは変わらないが、それでも尻尾を鍛えることによって克服ができたのだ。他のサイヤ人も同様で、鍛えても克服できないという人間はいなかった。

彼女の事だから、弱点は徹底的に無くそうとするはずだ。

「一応聞いておくけど、どれくらいやってた?尻尾のトレーニング」

「・・・二週間」

「二週間か、うーん」

普通、一週間もトレーニングをやっていればある程度は慣れてくるはずだが、どうや

らキューカはそうでも無いらしい。
　もしかすると彼女は、極稀に生まれるとされる特異体質を持っているかもしれない。
「まぁ、何も気付かないよりかはマシかな。もし気付いたのが戦闘中だと思うと、身震いが起きるよ」
　もし戦闘中に尻尾を握られたとしたら、酷い目を見る羽目を見る事になるだろう。これが前回戦ったリコ星人だった場合、確実に自分は死んでいたのだ。
　これだけで十分儲けものだと考えればいいのかもしれない。
「確かにそうだけど、どうするの？一週間後、キューカはまた仕事に出発するんだろう？」
「そうだけど、出発前までトレーニングをやることにするよ。それでも無理だったら、その時は気合で何とかするしかないけど」
　もしかするとあたしの尻尾は他のサイヤ人と比べて、やや敏感な体質を持っているのかもしれない。出来ればそうとは考えたくないものだが、仮にそうだとしたら我慢するほかないだろう。
　ハァ、いくらサイヤ人とは言え、弱点があるのは辛いものがある。
「・・・ねぇ、キューカ」
　ギネはまるで怯えるかのように、小さな声であたしの名を呼んだ。その目には、少し

ばかり怯えが含まれているようだった。
ギネの視線の先には、二人のサイヤ人はニヤニヤと笑いながら何か話す姿が見えた。二人のサイヤ人はまるであたし達二人を見定めるがの如く、舐めるような視線で見ていた。
一目見た瞬間、あの二人のサイヤ人はあたしにとって嫌いなタイプだという事を確信した。
「なんだ、あの二人は」
「分からない、けどずっとあたし達を見てるよ」
確かにさっきまで視線を感じていた。
まるで舐め回すかのような視線はあの二人だったのか。ハッキリ言って、不快だ。
「さっさと食い終わらせてここから出て行こう」
「うん、そうだね」
その時だった。
あたしとギネの様子を見ていた妙な二人組は動き出し、あたし達二人に近づいて来るのが見えた。
遅かった。そう思いながら近づいて来るサイヤ人二人の戦闘力を測る。・・・どちらも戦闘力は１５００程度、あたしの敵ではない。

「キュ、キューカ・・・」
「大丈夫、なんとかするさ」
震えた声であたしの名を呼ぶギネに声を掛けながら二人を見た。二人のサイヤ人の目は明らかに下心が丸出しだった。スカウターで相手の力量を測らない様子を見るに、相当な馬鹿だと言うことが判る。
「ヒヒッ、よう嬢ちゃん」
二人はあたし達がいる席まで来ると、ナンパにしては糞以下の誘い文句で話しかけて来た。上半身から下半身まで、舐める様にゆっくりとあたしの身体を見た。もはや、この時点であたしはこの二人を本気で殺そうかと考えたものだが、理性が働いたおかげで何とか思いとどまらせることができた。
「なに?」
キューカは冷めた目で、二人のサイヤ人を見た。いつ相手が何をしてきてもいいように、最大限の警戒をしつつ二人の様子を伺う。
二人のサイヤ人はギネはともかく、明らかにキューカの事も格下を見る目だった。戦闘力が低いのにも関わらず隙だらけ、戦士としても三流以下で相手にするのも馬鹿らしかった。
「そんな目で見ないで俺たちと遊ぼうぜ?」

「そうそう、あんたら二人で寂しく飯食うより俺たち二人と一緒に居た方が楽しいだろ？丁度俺らも二人だしさ」

ギネは心配そうに見るなか、あたしは額を触れた。この二人の馬鹿さ加減に、不快を通り越して思わずあきれてしまったのだ。

この手の奴は死んでも治らない、それどころか反省しないまま再び同じ事を繰り返すだろう。ある意味で、厄介な存在だ。

「誘うなら他をあたりな。今のあたしは機嫌が悪いんだ」

「なら俺がその機嫌を治してやるよ、な？」

「なあ良いだろう？」

断ったがいいものの、それでも尚しつこくこの二人にキューカの苛立ちが増していく。未だ１０代にもなっていない自分達に対し、所詮ガキだと見くびるその姿勢に不快に感じるのは当然の事だろう。

「はあ、いい加減にしてくれないか？」

「あ？んだとガキっ！」

「ガキの癖に何なｍ「黙りな」・・・っ!?」

殺気を送れば、二人の動きはピタリと同時に止まった。ちょっと殺気を送っただけでこれだ、その程度でビビるなら何故スカウターを使わなかったのか甚だ疑問だ。

威勢がいい割にただの小者じゃないか、笑わせないで欲しいものだな。
「さっきからあたしが下手に出れば、何故そこまで調子に乗れるんだい？その顔に付けてあるスカウターは飾りか？」
「このガキ、言わせてみればっ！」
「言わせてみれば、なんだって？たかがその程度の戦闘力で私を倒せると思っているのか？」
彼女は心底馬鹿にした口調で告げると、二人の目には捉えられぬ速さで片方のサイヤ人の首を掴んだ。
「う、が・・・」
「少し動いただけでこれか。元々期待はしていないけど、もう少しなんとかならなかった？」
首を掴む力を少し入れる。その少しがこの男にとって凄まじい力なのだろうが、彼女からしてみればどうでもよかった。
キューカの手から逃れようと足掻くが、息ができずやがて気絶してしまう。
男の気絶を確認した彼女は、完全に怯えきった男へと視線を向けた。
「ひ、ヒィっ！」
情けない声で悲鳴を上げて後ずさる男に、気絶した相方を投げた。ドサッ、と言う音

とともに男は腰を抜かし、その場に座り込む。
そんな男を見るキューカの目は、仕事で原住民を殺している時と同じ目であった。酷く冷たく、見るものを全て凍らせるかのような目、男に更なる恐怖を与えるのに十分過ぎた。
「一応、言っておくがあたしの戦闘力は５２００だ。その意味が、分かるか?」
既に青ざめていた男の顔が、更に青くなる。散々キューカを侮ったツケが、今ここで回って来たのだ。
相手の力量すら測ろうとしないこの男にとって、丁度いい教訓になるだろう。
「た、たすけ・・・」
「安心しな、命は取らんさ・・・。その代わり二度とあたし達に近付くな、次近づいたら・・・分かるよな?」
必死にコクコクと頷く男を見たキューカは、満足そうな顔で言った。
「いい子だ、ならさっさとコイツを連れて行きな!」
そう言われた男は相方を担ぎ、その場から逃げて行った。漸く面倒事が終わったと思いながら、あたしは深い溜め息を吐いた。
今日で何度目か分からぬ溜め息、この日だけでどれだけの幸運を逃したかと思うと物凄く腹立たしかった。

「だ、大丈夫？」
「ん？ああ、大丈夫だ。ギネは？」
「あたしも大丈夫」
「なら良かった。それにしても、あいつらは何だったんだ？成長促進剤のお陰で成長が早いとは言え、まだ１０に満たない歳だって言うのに・・・」
　明らかにあの二人の様子は異常其の物だ。二人の歳は四、五十代の中年、幼女趣味にしても何か様子が可笑しいようにも見えた。
「多分だと思うけど、女のサイヤ人って数が少ないらしいしそれじゃないかな？」
「つまりあいつらは行き遅れ、ねぇ・・・」
　前世のあたしもあいつらと同じだったようだから多少は同情できるが、それとこれとは違う。奴らはあたしの機嫌を更に損ねたんだ、これ以上は同情する気もなれん。
「まあいいか、さっさと飯を食って家に来ないか？」
「・・・？別に良いけどなんで？」
「この間食べたギネの料理が美味かったからさ、あたしもやってみたは良いけど分からない事があってな」
「そう言う事ならお安い御用だよ。作るなら帰りに何か買ってから行こうよ」
「お、良いねぇ。じゃあ何作ろうか――――」

この時点で既にキューカの頭からあの二人の事は頭の中から消え去っていた。記憶に値する価値も無い、それがあの二人に対する評価であったのだ。

ギネとキューカは、先程までの出来事がまるで無かったかのように、談笑を続けるのであった。

第十三話

「フ、フリーザ様。まもなく、惑星フリーザＮｏ．０に到着いたします」
フリーザは報告に来た部下をチラリと見る。
爬虫類タイプの異星人で、その外見はお世辞にも良い方とは言えない。とはいえ、フリーザ本人からしてみればそこは心底どうでも良かった。問題なのは、この者が酷く怯えている様子なのだ。
ガタガタと震え、今にも逃げ出したいと考えるその姿勢にフリーザは苛立ちを覚えた。
「フリーザ軍に臆病者は要りません。ドドリアさん！」
「了解しました。おい、大人しく付いてきな」
「あ、あぁっ・・・！お、お許しを・・・」
ドドリアに首根っこを掴まれた異星人はずるずると引きずられていき、命乞いの声が遠のいて行った。フリーザのもう一人の側近であるザーボンにとって、この光景はある意味見慣れたものであった。
基本的にフリーザは無闇に部下を粛清する事はないが、彼の機嫌が悪い時に限ってだ

が粛清が行われる事がある。主な粛清対象はフリーザに対して不満を持つ者、またはただの役ただずが対象になる事が多かった。先ほど連れて行かれた異星人も前者であり、クーデターを画策していた疑いがあったのだ。近い内に関係者全員も粛清される事だろう。

この時、ザーボンは機嫌が悪いフリーザの事を恐れていた。いつ自分にもとばっちりが来るのか分からず、先ほどの兵士と同様の未来が自分にも訪れるのではないかと恐々としていた。

とはいえ流石に顔には出してはおらず、普段通りの凛とした立ち振る舞いで内心を隠していた。

「ところでザーボンさん、以前ベジータ王に頼んでいた例の件、どうなりましたか?」

ザーボンの心情を知ってか知らずか、フリーザは数年前に命令していた話を持ち出した。一瞬見抜かれていたのかと焦りもしたが、気にも留めていない上司の姿を見るとザーボンは胸を撫で下ろしたした。

「つい先ほど、ベジータ王から例の件に関する報告が来ました。どうやら、七年前に生まれたサイヤ人のガキの親はエリート戦士だそうです」

「で、その親はどうしましたか?」

「手筈通り始末したと・・・」

「ほっほっほ、ベジータ王も保身の為とは言え随分と手際が良いですねぇ」
数日前に指示したばかりの命令、それがたったの数日で片付けられた事に僅かだが衝撃を受けた。
ベジータ王は下級戦士たちの事をあまり良い印象を抱いていない、それどころか徒党を組んで反乱を起こされる事を警戒しているのだ。下級戦士でありながら戦闘力値が王族並と聞いたベジータ王は、すぐさま子供の両親の特定に乗り出したのだ。
そしてすぐに子供の両親は見つかった。親は王族直属のエリート戦士、戦闘力は共に７０００と非常に優秀な者だ。
「優秀な戦闘員をその日の内に処刑ですか、ベジータ王らしいですね」
手渡された書類を見ながら、フリーザは小さな溜め息を吐いた。ベジータ王の過激すぎるその性格は、フリーザにとってあまり好ましいとは思っていなかった。何かある度に優秀な人間を殺し、身勝手に行動するベジータ王は何かと合理性に欠けている、というのがベジータ王に対するフリーザの評価だった。
「例のガキを下級戦士にした理由は、どうも育児の際に発生する義務が面倒と感じたようですね」
「ただの杞憂だったという事ですか・・・」
理由がどうであれ、フリーザはあの二人のサイヤ人を生かすつもりは端からなかっ

た。自分の許可なく、身勝手な行為を働く人間はフリーザにとっても目障りな存在なのだ。
「サイヤ人の子供は今何処に？」
「カーレ星の制圧に向かっているという報告がありました。始末致しましょうか？」
少し、思案する。此処で脅威にならない内に始末しておくか、そのまま生かしておくかでフリーザは考えた。勝手を働いて疑惑を持たれたのが親であって、その子供には何の罪が無い事を手元の書類がそれを証明していた。
「たかが猿一匹、放っておいても構わないでしょう」
精々自らの野望を成し遂げる駒になればそれでいい、というのが彼が出した結論だった。エリート戦士が親なのだからそれなりに優秀な戦闘力を持っており、何より下級戦士では極めて貴重な戦力に成り得る。ただでさえベジータ王はエリート戦士を出動させるのに難色を示し、よっぽどの事が無い限り前線に出ない。
「少し様子を見てから判断します。使えるのでありましたら、精々死ぬまで使ってあげなさい」
「ハッ」
失礼致しましたと一礼し退出して行くザーボンを横目に、フリーザは妙な胸騒ぎを覚えた。理由は分からない、まさかあの子供が・・・？と思案するもフリーザは単なる杞

憂だと断じ、他の事に意識を向けさせた。

今から数十年後、この何気ない判断が己の首を絞める事になるとは知らずに・・・。

第十四話

時が進むのは案外速いもので、あたしの年齢は１１になった。だからと言って生活が変わったという訳ではなく、相変わらず惑星の住民を皆殺しにする仕事を続けている。

身長もかなり伸び、背だけで言えば男と同じだ。あたしの両親の身長がどれくらいなのか知らないが、低身長ではなくて本当に良かったと思う。しかし戦闘力の面でそこまで伸びておらず、戦闘力数は５５００が限界だ。

恐らくこれが、今のあたしの限界なのだろう。あくまでこれは自論ではあるが、何かしらのキッカケが必要なのかもしれない。

「戦闘力のコントロールが出来れば、強くなれるかもと思ったのだけど・・・」

ここ半年、暇を見つければＺ戦士達のように気のコントロールを会得しようと試行錯誤を繰り返しているものの、その道はまだ遠い。数年前に戦ったあの異星人は戦闘力のコントロールができていたが、あたしには真似出来なかった。ベジータは地球で戦った時に覚える事が出来たのだから才能の差を感じる。

「やっぱ、この手の技術は地球でなければ無理なのか？」

原作に関わる気が無いあたしからしてみれば、地球に行けないのは痛い事実であっ

た。戦闘力のコントロール技術を体系化している星は今のところ地球しか知らない。戦闘力のコントロールが可能な人間は何らかの突然変異なのでは、という説があり、後天的に会得出来るものではないと聞く。

改めて地球はこの宇宙に於いて特異な存在なのかもしれない。ドラゴンボールのストーリーを思い出す度に感じるが、魔封波然り舞空術然り独自で編み出したあの星の人間は技術に凄まじいものがある。

「原作には影響がない程度にこっそり会得するのも有りか・・・?」

しかしそれだとリスクが大き過ぎる。キューカという存在は、この世界にとってイレギュラーな存在でしかない。いつになるか判らないが、今後この宇宙は何度も滅亡の危機を迎えるのだ。あたしが下手に地球に行けば、それこそ宇宙滅亡の原因になる可能性が十分にあった。

セルや魔人ブウと是非とも戦ってみたいものだが、あたしが原因で最悪な結末にはさせたくはない。

「やっぱ、独学でやるしかないかぁ」

溜め息混じりに呟き、天井を仰いだ。目標までの道のりは果てしなく、遠い。まるで雲を掴むような試み、独学でなんとかなるとは到底思えなかった。

しかしそれでも尚、やらなければならない。己を強くする為、更に上を目指す上でこ

の技術は必須とも言える。

「一からやり直すか」

アニメで見た断片的な情報を頼りに、キューカは心を無にした。己の膨大な力を感じるべく、意識を集中させた。

部屋の外から聞こえる音が煩く感じ、雑念が入る。侵略先の星で暇な時を見つけては心を無にし、修行に励んでいる。人気が無いお陰でだいぶ捗るが、成果は一向に感じられなかった。故に時折、キューカは疑問に感じるのだ。

自分には才能が無いのかと――――

最近の戦闘力の伸びにしても、この修行にしても成果を感じる事が出来ない事にキューカは不安に感じ始めた。完全な独学故に、己の才能を見極める事が出来ない。

もしかしたら自分はここまでしか強くなれないのか・・・と不安で頭が一杯になり、修行どころではなくなる事が多々あった。出来る事なら今すぐ地球へ赴き、優秀な師の下で力を得たいのが彼女の本音だ。

しかし、それは出来ない。前述した通り、自身が地球に行くことによって本来の歴史が変わってしまう事を恐れたからだ。

「はぁ、別の方面で考えるしかないか・・・」

この修行に費やしていた期間、技の開発やトレーニングに使っていたのならどれ程強

くなっていたのだろうか。もしかすると再び戦闘力が上がる可能性だってあったかもしれない。

キューカの苛立ちは、時間に経つにつれて募るばかりだった。今更後悔しても仕方がない、そう感じたキューカは数回の深呼吸で気分を落ち着かせた。

なにも強くなる手段は他にもある。別にZ戦士達と同じ技術に拘らなければ良い、ギニュー特戦隊でさえ戦闘力のコントロールができないのだ。

キューカは一つ吐息し、軽く伸びをした。背骨が小さな音を立て、若干体が凝っている事が分かる。

なんせ数時間の間、ずっと同じ姿勢を保っていたのだから当然だろう。幾らサイヤ人と言えども、凝るものは凝るのだ。

キューカは壁に掛けてあった時計をチラリと見た。丁度昼時の時間帯、今から飯処へ向かったとしても、混んでて時間がかかるだろう。

「なんか、作るかぁ」

元々キューカは、個人的な趣味として料理を嗜んでおり、よく自分で調理して済ませる事がある。元々ギネが作る料理に影響されて始めたものだが、彼女はかなり気に入っていた。

普段取り組むトレーニングとは違い、前世食していた食べ物を再現するのが思いの外

楽しかったからだ。
飯処で出される料理は単調で、お世辞にもあまり美味いとは言えない。自分で作った方が手軽な上、美味しいという理由も相まってここ暫くは飯処には通っていない。
「さて、なにがあるかな・・・」
冷蔵庫を物色しながら、彼女は思案する。冷蔵庫には何も入っておらず、唯一残っているのが先日買ってそのままにしておいた飲み物のみ。
仕事柄買溜めをする意味は無いが、彼女からしてみれば死活問題もいいところだった。昨日の内に買い出しへ行かなかった自分を悔やんだ。
これでは調理する以前の問題だ。買い出ししようにも時間がかかり、それこそ飯処に行った方が時間的にも余裕ができる。
別に自炊だけに拘る必要はなく、帰りに夕飯の食材を買って行けばいい。
冷蔵庫の扉を閉め、キューカは小さな溜め息を吐いた。
またあの騒がしい場所に行かなければならないかと思い、機嫌が悪くなるのを自覚する。飯処に行けば奇異な目で見られるからだ。
彼女にとってそのような目で見られるのはあまりいい気がせず、何より面倒くさい事が稀に起きるからだ。自身の力に酔い痴れ、己より目立つキューカの働きが気に食わないサイヤ人が、彼女に挑む事があった。

「・・・?」

玄関をノックする音が聞こえた。

眉間に皺を寄せ、心底面倒くさいと思いながら一言どうぞと言う。

この家に滅多に来客は来ない。だが全く来ないという訳ではなく、来るのは新たな仕事を伝えに来たフリーザ軍兵士やギネくらいだ。

ギネは最近忙しいと聞く。主な仕事は反乱惑星の鎮圧や地上軍と合同の作戦に駆り出されるのが多いらしい。

「また仕事か・・・本当に人使いが荒いよまったく・・・」

そう言いながら、ガチャリと音が鳴りながら開く玄関の扉を見る。

今度はどれくらいで帰ってこれるのだろうか。キューカは再び小さな溜め息を吐いた。どれ程早く終わらせても、移動だけで一週間や一か月かかることは普通だ。アタックボールには睡眠補助機能がある為、到着までの間は寝続ける事が出来るが、どうしても暇になるときはある。

その移動の際にある時間が、どうにも好きにはなれないのだ。

「キューカっ、久しぶり!」

彼女の心情とは裏腹に明るく、数か月に聞く声が耳に入った。

思いにもよらぬ来訪者に、キューカは驚きのあまりフリーズする。やがて再起動を果

たした彼女は、ギネに対し久しぶりと返した。
「どうしたんだいきなり・・・それは?」
視線を下に向けると、何やら大き目の袋があった。袋の口がギネの方向を向いている為、中身を見ることはできないが、一瞬だけ食材が見えたような気がした。
彼女の問いかけに、ギネは笑顔で答える。
「ん?これ?キューカが帰って来ているって聞いたから行くついでに買って来たんだ。今日は混んでいるって聞いたし、久し振りにあんたと作りたいからね」
「助かるよギネ、丁度冷蔵庫が空で困っていたんだ」
久しく見るギネの顔は、どこか見た事がある顔だと感じた。だが、今のキューカにとってどうでもよかった。
今や、キューカにとって彼女は親友に等しい存在だった。その事実は、変わらない。